
真・けいおん！

ハウス後輩（♂）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・けいおん！

【Nコード】

N8720K

【作者名】

ハウス後輩（♂）

【あらすじ】

けいおん！にオリキャラ男。

2年生から入部することになった主人公「朗蘭道」が部員達と関わっていく。部員の女の子達とのラブコメも？！

第1話（前書き）

どうも、ハウス後輩（♂）です。初投稿です。文才が無いので下手なところは多目にみてくださいm（――）m

今回は最近2期が始まったけいおん！の時期に男キャラを入れてみました。学校設定やキャラの関係が若干違いますがご勘弁を。

第1話

「ここが音楽室か・・・」

俺の名前は「朗蘭道」^{ろうらんどう}。桜高に入学して今年で2年生になる。な
んで音楽室前にきているかというと、簡潔に言えばここで活動して
いるという軽音楽部に入部してきたのである。何で今更？という質
問は追々話そう。

道「・・・よし！」

俺はドアをノックした・・・が！『返事がない、ただの屍のようだ。
』じゃなくて！

道「いないのか?!」

ドアを開けてもひとつこひとりいない。

道「今日はやってないのか。」

というか部活動勧誘初日に部室に誰もいないって・・・。がっかり
はしたが、まだ時間はある。今日は帰ろう。

そして靴を履き替え学校をでると、奇妙な着ぐるみを着た5人の人
達がビラを配っていた。・・・正直あれはどうかと思う。全然まっ
たくもって可愛くない。あれでは誰も受け取らないだろう。

道「必死なんだな・・・」

と勝手に同情しつつ横切ろうとすると、ニワトリの着ぐるみをきた
5人の中の1人が駆け寄ってきた。

トリ着「これどうぞ!!!」

道「どうも。」

元気が良いな。・・・誰も貰わないとか言いながら貰ってしまった。
とりあえず貰った紙を良く見ると、『軽音部 楽しいよ(はーと)』
と書かれていた。

道「いたー！ー!!!」

俺は思わずさげんでしまった。恥ずかしい (照)
5人「え？」

この人たちとの出会いは忘れられないだろう。

第2話（前書き）

遅くなってm（—）m

第2話

？「で、名前はなんていうんだ？」

道「朗蘭 道といいます。」

あのあと音楽室に招待された。本日2度目の音楽室。

律「あたしの名前は田井中 律だ。担当はドラム。よろしく。」

道「よろしくお願いします。」

デコ先輩と呼びたいほどの立派なデコだ。

？「珍しい名前だな。」

律「でこつちの恥ずかしがり屋さんは漣。」

漣「こら！勝手に紹介するな！改めて、秋山 漣だ。担当はベース。よろしくな。」

道「もしかして部長さんですか？」

漣「いや・・・実は・・・」

律「部長はあたしだよ！！」

道「え？あ、なんかすいません。」

律「バカにしてるだろー！！」

漣「うるさいのはほつといて、こつちの寝てるのはギター＆ボーカルの平沢 唯だ。起きろ」唯。

唯「はっ！なんでしょうか！？」

漣「ほら新入部員に挨拶！」

唯「zzz」

また寝てしまった。俺も眠たくなってきた。

律「無視するなー！！」

紬「私はキーボードの琴吹 紬よ。」

道「よろしくお願いします。」

お、お嬢様オーラが・・・まぶしい。

漣「なんか礼儀正しいな。」

道「いえいえ、ただ緊張してるだけですよ。それよりも、みなさん

優しそうで良かったです。」

律「それほども（照）」

道「ところであっちの椅子に座ってるひとは・・・」

漣「あ！紹介が遅れた。梓！なにしてるんだ？」

梓「別になんでもないです！」

漣「ほら、早く自己紹介を。」

梓「2年の中野 梓！担当はギター！！」

なんか怖いな・・・

道「なんで怒ってるんですか？」

漣「いや・・・私にもわからん。」

なぜか嫌われているようだ。部活動は仲良くなければダメだ！

律「完全に忘れられた・・・」

漣「悪かった律。ワルノリしすぎた。」

律「後でおごりな！」

漣「わかったよしょうがないな」

律「漣のそうゆうところ好き！」

漣「こらくつつくな！！」

なんか仲良さそうでいいな・・・

漣「ここに来たってことは楽器やってるんだよね？」

道「はい。」

漣「なんの楽器なんだ？」

道「基本的に何でもできますけど・・・」

漣「ほんとか？！」

律「だったら弾いて見せろよ」

なんだ後輩いじめか。本気でいってやろうじゃないか。

道「いいですよ。何からいきますか？」

律「まずドラムから！！」

道「ではお借りします。」

律「（どうせ全部中途半端だろ）」

♪
律「！」

漣「これはすごいな・・・」

律「・・・（悲）」

道「良い音のドラムですね。」

律「ありがとう・・・（泣）」

道「なんで泣いてるんですか？」

漣「聞くな・・・」

・・・まあいいか。

唯「はいはいはーい！次私の番！」

いつ起きたんだろうか。

道「ギターですね。わかりました。」

♪
梓「！」

唯「あずにゃん、これなんて曲？」

梓「ジミ・ヘンドリックスの『machine gun』ですね。
並大抵の人じゃこんなにできませんよ。」

唯「あずにゃんが褒めるなんてすごいね！！今度教えて！」

道「善処します。」

オレに・・・できるのか・・・

紬「じゃあ次は私ね。」

道「わかりました。」

♪
♪

紬「すごいわー！ケーキもう1個あげちゃう！」

甘いものってあんまり好きじゃないんだよね・・・

紬「どこで習ったの？」

道「独学です。全然ダメですけど。」

紬「そんなことないわ。（独学でこれなの?!）」

独学というかテレビでみたやつなんだけど・・・

漣「次は私だな!」

道「ベースが1番苦手なんです。」

漣「そうなのか・・・」

道「あまり期待しないで下さい。」

（ ）

漣「私ベースやめようかな・・・」

道「なんで?!」

漣「私に変わってお前がベースやったらいいんだ!（泣）」

泣かせてしまった。ど、どうしよう・・・とりあえず、言うておくか。

道「俺みたいに技術だけあっても意味ないですよ。みなさんには人を惹きつける魅力があります!」

律「技術があるのは認めるんだな。」

道「うつ・・・」

かつこいい事言って墓穴掘った・・・

道「あのですね、今のは言葉のあやというかなんというか・・・」

見苦しいな俺!

律「フツ。」

鼻で笑われたよ!なんだか目から水が・・・

漣「こんなに上手かったらだれか抜けなきゃならないかもな。」

律「お、立ち直ったか。」

道「その心配はありません。俺は演奏する気ないので。」

唯「どうして?」

道「音楽に関わっていればいいので。」

紬「そんなに上手いのもったいないわ。なにか理由があるんじゃないかしら。」

道「・・・」

漣「言いたくないならしょうがないな。」

道「すいません。」

いらぬ不安を与えてしまった・・・いつか言わなきゃな。

律「よし！気分を取り直してお茶にするか！」

唯「賛成〜！！今日のお菓子なに〜？」

梓「お菓子？朗蘭？」

漣「どうした梓？」

梓「朗蘭つてもしかして・・・」

唯「朗蘭堂がどうかしたの？」

律「なんだ唯、知ってるのか？」

唯「今超人気のお菓子屋さんだよ！」

紬「私も知ってるわ〜！今度買いに行こうと思ってたの。」

漣「よく知ってるな・・・」

律「ん？そういえば道、名字なんだっけ？」

道「・・・朗蘭です。」

あゝばれたな・・・

漣「もしかして・・・実家？」

道「はい・・・」

唯「なんで言ってくれなかったの？！分かってたらもっと歓迎したのに！」

だからですよ、先輩。

梓「下心みえみえですよ、先輩。」

道「隠してたわけじゃないんですけど・・・」

唯「いや〜、いい後輩を持ったね私たち。」

律「お菓子目当てだろ！」

やつぱり持つてこなきゃだめだよな。だから言わなかったんだ。

道「ときどき持つてきますよ。家の菓子。」

唯「ほんと？助かるな〜」

律「とりあえずあたしたちは道を歓迎する！」

なんとか歓迎された、1人を除いて。どうしたもんか・・・

第2話〜梓side〜（前書き）

今回は梓sideということで、梓視点でお送りします。ぶっちゃけ前回と同じ話なのでつまらない人が多数いると思いますが、そういった人は読み飛ばしてもらってぜんぜんOKです。これ読んじやうとこれからの展開がみえてきちゃうので…

第2話　梓 side

後ろでは先輩たちと新入部員の人を楽しそうに話してる。ろっらんどう？だっけ？楽器のメーカーみたいな名前。

梓「はあ…」

新入部員が入ったのは良いんだけど、入ったら入ったでなんだか嬉しくない…

漣「珍しい名前だな。」

律「こつちの恥ずかしがり屋さんは…」

漣「こらっ！…」

唯「zzz」

先輩たちはあいつに興味津々。唯先輩は寝てるけど。なんかムカつく…もしかして私嫉妬してる？

漣「梓！なにしてるんだ？」

梓「別になんでもないです！」

漣「？」

なんで私先輩にあたってるんだろ…

漣「ほら、早く自己紹介を。」

なんでこんなやつに…そもそも全部こいつが悪いんだ！

梓「2年！中野　梓！担当はギター！」

あいつとは仲良くなれそうもない…かも。

漣「ここに来たってことは楽器やってるんだよな？」

道「はい。」

漣「なんの楽器なんだ？」

道「基本的に何でもできますけど…」

律「だったらやってみるよ」

道「いいですよ。何からいきますか？」

律「まずドラムから！」

そんなに出来るわけないでしょ！どうせ全部中途半端に決まってる！

♪

律「！」

梓「！」

正直、律先輩より上手い…！しかもかなり。律「……（泣）」

律先輩…かわいそうに…でもどうせこれだけでしょ！

唯「はいはいは…い！次私の番！」

なんで唯先輩楽しそうなんですか？！てゆうかいつ起きたんだろう

…でもギターはそんなに甘くない！

♪

梓「！」

ジミ・ヘンドリックスの『machine gun』！なにこれ？

！夢？！

唯「あずにゃん、これなんて曲？」

梓「ジミ・ヘンドリックスの『machine gun』ですね。

並大抵の人じゃこんなにできませんよ。」

唯「あずにゃんが褒めるなんてすごいね！今度教えて！」

えっ？

口から自然と誉め言葉がでていたらしい。

ひと通り見たけどやっぱり全部上手かった。私たち全員よりも。私は初めて天才というものを見た…と思う。すごすぎて何がなんだかわからなかったから…

漣「こんなに上手かったらだれか抜けなきゃならないかもな。」

なんてこと言うんですか漣先輩？！そんなこと許さない！

道「その心配はありません。俺は演奏する気はないので。」

…それはそれでム力つくというか、生意気というか…。なんか私矛盾してる

紬「そんなに上手いのもつたいないわ。なにか理由があるんじゃないかしら？」

ちようど私もそう思ってたところだった。まあ、どうせたいした理由でもないでしょ。

道「……………」

漣「言いたくないならしょうがないな。」

道「すいません。」

漣先輩、そんなやつのこと気にする必要ありませんよ。どうせいか
がわしい理由に決まってる！私けっこうひどいこと言ってるかも…
律「よし！気を取り直してお茶にするか！」

唯「賛成ー！！今日のお菓子なに？」

また唯先輩は…。お菓子のことしか考えてないんですか…。そうい
えば、最近テレビでやってる人気のお菓子屋さんってなんて名前だ
っけ？

確か朗蘭堂だったはず…

梓「お菓子？朗蘭？」

漣「どうした梓？」

梓「朗蘭ってもしかして…」

唯「朗蘭堂がどうかしたの？」

律「なんだ唯、知ってるのか？」

唯「今超人気のお菓子屋さんだよ！」

紬「私も知ってるわー！今度買いに行こうと思ってたの。」

漣「よく知ってるな…」

律「ん？そいえば道、名字なんだっけ？」

道「……………朗蘭です。」

漣「もしかして…実家？」

漣「はい。」

やっぱりそうだと思った。この辺で朗蘭っていったらあそこしかな
いもんね。

唯「なんで言ってくれなかったの？！分かってたらもつと歓迎した

のに！」

唯先輩、わかりやすいですよ…。

梓「下心みえみえですよ、先輩。」

道「隠してたわけじゃないんですけど…」

唯「いや、いい後輩を持ったね私たち。」

律「お菓子目当てだろ！」

まったくその通りですよ…。もうお菓子 道 って感じ…。もはや
お菓子中毒なんじゃ…？。

律「とりあえずあたしたちは道を歓迎する！」

律先輩はあんなこと言ってるけど、私はいまいち信用できない…。
とりあえずこの人とは距離をとっておこう。

私たちは知らなかった、この人によって桜高軽音楽部の未来が変わ
るだなんて…

第3話（前書き）

今回は忙しくて遅れてしまいましたm（――）m
今後もしこんなふうに遅れることもあるかもしれませんが、暖かく見
守ってください。

そして今回ですが、長いです。飽きてしまったら止めても構いませ
んの、適当に読み飛ばしてください。

第3話

時間は流れて次の日の放課後。いまは音楽室の前にいる。

律「ここの掃除は音楽室の掃除当番がやってくれるんじゃないの？！」

唯「そうだ！そうだ！」

なにやら騒がしい。

なにやってるんだろ…とりあえず入ってみるか。俺はドアを開けた。そこには…ダンボールの海が広がっていた…

道「なにやってるんですか？！」

律「お！道、遅かったな。」

道「すいません、掃除が遅れまして。ところでこれは？」

律「さわちゃんに物置かたずけろって言われてさ…」

唯「めんどくさいよー！」

漣「これ唯のдарろ？」

さわちゃんって誰だ？顧問の人かな？まあいいか。どうやら悪戦苦闘してるみたいだな…

道「掃除なら俺にまかせて下さい！」

紬「ほんと？助かるわ！」

掃除歴10年の俺に任せればこんなの朝飯前だ。家では誰が汚そうとかたづけるのは俺だった…

律「ほんとか？」

道「まかせて下さい！まず自分の私物を持って行って下さい。」

唯「これも持っていかなきゃダメ？」

そこには大きな力エルの人形があった。どっから拾ってきたんだ…

道「持って行って下さい。」

唯「どうしても？」

道「どうしても。」

唯「道くんのケチ！」

道「なんとも言うて下さい。俺は掃除に関しては譲れません！」
唯「わかったよう……」

なんとか言う事を聞いてくれた。

漣「……」

なぜか漣先輩がおどろいている。

漣「どうしたんですか漣先輩？」

漣「……（涙）」

涙を流している。ええ？なんで？！

漣「いや、しっかりしてるのが私だけかと思ってたから味方がいて嬉しくて……」

なんだ俺が泣かせたじゃなくて良かった。よし、ここは一つかっこいい事を。

道「俺はいつまでも漣先輩の味方ですよ。」

漣「道……」

うまくいった！よかったよかった。反応無しかったらどうしようかと思った……ん？後ろから殺気が……

梓「……（殺）」

道「さあ掃除掃除。」

あぶねえ……視線で殺されるところだった……

それから数十分後、

道「それにしてもすごい量だったな……」

あの後、真剣に取り組み（主に俺と漣先輩と梓）、いらぬ物をまとめあらかた終わったところだ。

漣「やっと終わった。」

道「大変でしたね。」

そして紅茶をすする。美味い。まさに至福のひとときだ。そういえば唯先輩がいない。

唯「みんな見てー！ばばーんー！」

唯先輩は大きな箱を拾ってきた、もとい持ってきた。おそらくギターケースだな。

唯「開けてみるね！よいしょ。」

道「おお…」

中にはどう見ても年代物のギターが入っていた。

紬「面白い形のギターね。」

律「なーんだ、ギターか。」

唯「もっと面白い物がよかった」

おいおいちよつと待て。

漣「こんなに古かったらもうダメかもな…」

道「ちよつと待って下さい。」

紬「どうしたの？」

梓「？」

道「GibsonのSGカスタムですね。」

唯「えすじーって何？」

梓「ソリッドギターの略です。簡単に言えばギターの種類の一つですな。」

唯「へー…」

どうやら唯先輩は分かってないようだ。

俺はシリアルナンバーを見た。

道「！？」

漣「どうした？」

道「なんでこんな物がここに…？」

律「確かにカビくさいけどな…」

道「そういうことを言ってるんじゃない！このモデルは1960年代始めに産まれたもので、当初は材料や形が決まってなく、様々な仕様のマイナーチェンジが繰り返されてこの形になったと言われています！」

律「長いな…」

道「さらに、このギターのフィンガーボードには、『ハカラランダ』

という今となつては貴重な木が使われています。」

漣「つまりどうゆうことなんだ？」

道「めちやくちゃすごいギターなんですよ……！！保存状態も良いですし……」

はっ俺としたことが！我を忘れてしまった……。機材のことになるとつい熱くなつて……

唯「難しくてわかんないや。」

梓「唯先輩、弾いて見てください！」

唯「よし、任せといて！」

ガチャ

だれか入ってきたみたいだ。きつと顧問の先生だろう。

？「かたづけ進んでる？」

どこかで聞いたことのある声だな。誰だっけ？

唯「あ！さわちゃん！」

梓「さわ子先生、こんにちは。」

え？さわ子？いやいや、あの人がこんなところにいるわけないよな。

うん。

俺は振り返つてみることにした。

さわ子「みっちゃんじゃない！久しぶり！」

道「やっぱりさわ姉か……」

漣「どうゆうことなんだ？」

道「さわ姉、さわ子先生とはいわゆる『いとこ』ってやつです……」

紬「あらまあ偶然ね！」

なんでコイツがここにいるんだー！そういえば教師になったとかいつてたな……

さわ子「なんでここにいの？！」

道「いろいろあつたんだよ！」

さわ子「まあいいわ。それより懐かしいわね、それ！」

梓「やっぱりこれ先生のなんですか？！」

さわ子「おじさんからもらってね。あれから何年も弾いてないからもうダメかもね…」

道「なにがもらっただ。みたことあると思ったら、それ父さんのじゃないか！」

さわ子「あれ？そうだったかしら？」

この確信犯め！借りるっていつて今まで帰ってこなかった…

唯「さわちゃんひどい。」

律「さすが魔性の女…」

梓「そういうことじゃないて思いますけど…」

さわ子「そんなことより！もう弾く時間もないし、もうダメかもしれないからお店に売って部費の足しにしてちょうだい。」

律「さわちゃん太っ腹！」

まあ父さんの金なんだけどな。

それから数分後、俺達は早速楽器屋へ向かった。

唯「ううゝ、重いよ」

律「じゃんけんで三連敗したお前が悪い！！」

道「じゃんけんなら負けません！」

紬「唯ちゃん、もう少しで時間よ。」

唯「ほんと?!次は負けないよ！」

俺達はギターを誰が運ぶかでじゃんけんで負けた人が持つ制度を採用する事にした。もちろん俺は無敗。

律「着いたー！」

道「……」

あれから俺は4連敗して最後まで来てしまった。あるときパーさえ出さなければ…

漣「お願いします。」

店員「では査定終了まで少々お待ち下さい。」

ところ狭しと楽器が並べられている。初めてきたけど、雰囲気の良い店だ。

道「暇だ…」

うろつろと店内を散策していると。漣先輩と梓が真剣そうに話している。俺のこと…ではないよな。

店員「査定終了いたしました!」

唯「10万円くらいいったらいいね!」道「もうちょっと高いですよ。25万くらいじゃないですか。」

まあその位いったらいいほうだよな。

店員「えーと、こちらのギターなんですが、50万円で買い取らせていただきます。」

全員「えええー!?!?」

おいおいちよつと待て。予想をはるかに超える金額に驚いてるのは俺だけか?

紬先輩以外みんな固まってる。

漣「ごちそーさまでした!よし!」

といって漣先輩が何事も無かったかのように帰ろうとする。

律「ちよつと待て!」

律先輩が引き止める。

漣「ただだだつて!500万たぞ?!」

道「桁違いますですよ。」

律「おい、変な言葉になってるぞ。」

紬「ありがとうございます。」

律「おめえは躊躇なさすぎだー!」

さすがの俺も動揺している。50万なんてみたことない!

律「なんでそんな値段するんですか?もしかしてむぎに気をつかって…」

店員「いえ、それは関係ありませんよ。このモデルは…(略 前ペ

「ジ参照」

5人「……」

店員「とにかく！とっても貴重なものなんですよ！」

律「肉厚っ！！」

唯「スペシャルバーガーだよ。」

律「バーガーの話じゃねえ。」

今俺たちは近場のハンバーガーショップに来ている。

漣「ていうか、ポテト多くないか？」

律「これだけの金があるんだぞ？ポテトXLサイズ、つりはいらねえ！！」

いや、しっかりもらいましょう。

漣「まさか遣ったのか？！」

律「いや、これは自腹だけだな。」

道「よっ、太っ腹！」

律「だれがデコだと！？」

道「正しくはデブじゃなんじゃ……」

律「じゃあだれがデブだと？！」

じゃあつて……しかもそこまで言っていないんだけど……

梓「でもいいんですか？みんなで貰っちゃって……」

律「仕方ないだろ、さわちゃんが部費にしろって言ったんだから。」

唯「ブヒブヒ！」

梓「でも……」

律「ほら！6人で分けたら1人約8万3000円だぞ？」

なんで計算早いんだ……

梓「私、欲しいエフェクターがあるんですよね……」

みんな次々に欲望のままに欲しいものを挙げていく。金は恐ろしい

……

道「ちなみに俺はいらなくて、みんなで分けてください。」

律「なんで？！」

道「そんなふって湧いたような金なんて怖くて貰えませんよ!」

律「そんなもんかな?」

道「しかも、結局さわ姉に言ったら全部とられますよ。」

律「なんとかなるだろ!」

そして次の日の放課後。俺たちはこの前の楽器屋に行く途中にあったホームセンターで物置に置く棚を買い、部室で組み立て、今整理し終わったところだ。

漣「いいカンジだな!」

道「そうですね。」

ガチャ

さわ子「棚届いた?あら、いいカンジじゃない。」

律「ギクツ」

さわ子「なによ!無視しないでよ!そういえばどうだった?」

律「どうって...なにが?!」

さわ子「私のギターよ。」

律「えーと...」

漣「結構珍しいギターだったらしいですよ!」

さわ子「へー、で結局いくらだったの?」

律「...1万円くらいかな...」

それはさすがに...

漣・梓「(それは欲張りすぎでしょ!)」

さわ子「やっぱりそんなもんか...」

律「ふうー...」

さわ子「じゃあ領収書ちょうだい。」

律「なんで?!」

さわ子「部費に計上しなきゃいけないでしょ。早くだして。」

律「えーと...」

さわ子「まさか貰ってこなかったの?!」

いわんこつちやない。

律「ガザガザ、…スッ」

さわ子「なんだあるじゃない。」

律「……パクッ」

食べた！？そこまでやる必要あるか？なんて意地汚い…

さわ子「なにやってるの？！出しなさい！」

律「んー！」

さわ子「いいから出しなさい！！！」

律「はい…」

さわ姉のあの顔は律先輩のトラウマになっただろう…

さわ子「50万もしたの？！すごいじゃない！」

律「悪気はなかったんです…」

さわ子「じゃあ部費として1万円だけ計上するわ！」

律「そんな〜！」

だから危ないって言ったのに。

さわ子「正直に言えばぜ〜んぶあげたのに。」

それは嘘です。

律「じゃあこのお金でなにか一つだけ買ってあげる。話し合って決めなさい。」

道「買うなら無難にアンプですかね。」

漣「エフェクターもいいと思うけどな。」

帰り道、俺たち軽音部は一つだけ買えるものを考えていた。

唯「私にいいアイデアがあるんだけど、私に任せてくれないかな？」

律「大丈夫か？」唯「任せといて！」

そう言って自信満々に学校にもどっていった。

次の日の放課後、部室には大きな水槽が置いてあった。
道「何ですかこれ？」

唯「これはね、トンちゃんだよ！」

トンちゃんってだれだよ！そこには亀なのかスッポンなのかかわからない生物が泳いでいた。

漣「なんで亀なんか買ったんだ？」

唯「だって私たちがいなくなったら、あずにゃんとみっちゃんだけなんだよ？！寂しいじゃん！」

道「唯先輩……」

いつもはへらへらしている唯先輩だけど、誰よりも後輩思いの先輩だった。

このこっぴどかしい空気なんとかならないか……そうだ！

道「唯先輩、なんでみっちゃなんですか？」唯「さわちゃんが言ってたから。私はかわいいと思うよ。」

道「そうですかね……」

かわいいと言われて真っ赤になった顔を隠すように俺は後ろを向いた……

第4話（前書き）

大変間が空いてしまいました。申し訳ないですm（――）m
もうけいおんのアニメは終わってしまいました。終わってしまった
て悲しい人は是非読んでいただきたいです。

第4話

桜も散って、もう春も終りに近づいてきた頃。2年生の授業にも慣れてしまったその日の放課後。

道「はあ…」

飽きた授業に耐え忍び、何とか放課後になったものの、これから部活である…確かに楽しい。楽しいけど先輩たちの対処が…。最近全然練習したのを見た覚えがない。まあそれはいいか。

？「おう！どうした！」

道「なんだ齋藤か…」

齊藤「なんだとはなんだ！」

こいつは齊藤。1年生の時から友人で、気が合ってよくつるんでいる。根っからのビートルズファンだ。

道「テンション高いな…」

齊藤「バスケで勝ったからな。」

道「あれはしょうがないだろ！」

今日の5時限目の体育はバスケで、俺と齊藤は別々のチーム。俺と齊藤はそれほど上手くはないけど他の人よりは頭一つ分抜き出ているという力関係。どんどん点数を重ねていく俺にマークがついた。

2人ならまだしも3人。俺はなすすべなく負けた…

道「次までに作戦を考える。」

齊藤「せいぜいがんばれよ〜じゃあな！」

どんだけ体育に熱中してるんだよ、という突っ込みは置いて…

道「部活行くか。」

教室を出るとちょうど梓が部室に行くところだった。

道「おう梓！」

梓「どーも。」

そしてスタスタといってしまった。ものすごい孤独感…。人はこうやって人生の経験値を稼いでいくんだ…。

そして部室の前に到着。

なんだかと騒がしいな。いつものことだけど。

今日もまた先輩たちにつつまなきやいけないんだろうな…よし、がんばろう！そしてトントんと2回ノックして入る。

ガチャ

律「ドラムやだー!!」

いきなり何をおっしゃる。

唯「あ！みっちゃん！」

道「どーも。で、いったいこれは？」

漣「いや、いきなり律が…」

修羅場に遭遇したかと思った…

律「すまん、やだとは言いすぎた。だが！これを見よ！生徒会で録った軽音部の活動記録。和のどかがくれたんだけど。」

和とは、おそらく生徒会長の真鍋まなへ和のどかさんのことだろう。ノートパソコンの前にみんな集まる。

〽

紬「わ！1年の学園祭！」

唯「なつかしい〜！」

梓「私見ました。漣先輩の…」

漣「わー！やめろー!!」

もちろん俺も見ていた。ライブでは自分の実力以上の物がでると良く聞く。まさにそんなライブだった。

律「ちがあーうつ！ドラムのとこ見てみる。」

えーと律先輩は…暗っ！

唯「りっちゃん暗っ！あつ、でもおデコ明るいね。」

律「うるせえ！」

唯先輩がいうのも無理は無い。律先輩顔見えねー！

道「……………（笑）」

律「なに笑ってんだ道！」

道「すいません。予想以上に面白くて（笑）」
いや本当に面白い。今世紀最大かもしれない。

律「くそー…」

漣「ライトが当たってないのか。」

ひと通り見たが、すべてライトが当たってなかった。ここまで当たってないなんて…もはや事件だ。

律「しくしく…（泣）」

隅っこで律先輩が噓泣きしている。

梓「それで？」

律「…他の楽器やりたい。」

またまた何をおっしゃる。

漣「ちよつと待て！律がやらなかったら誰がやるんだ?!」

漣先輩のご意見はごもつともである。俺もやりたくないし。

律「くくく（口笛のつもり）」

道「考えてなかったですか…」

漣「ドラム以外はちまちましててやダって言ってなかったか？」

律先輩にお似合いなセリフだ。たしかに一理あるような、ないような…

律「それはそうだけども、たまには換えっこしてみようぜ、楽器。」

唯「楽しそう！」

紬「いい！」

漣「え?!」

唯先輩が言うとは思ってたけど、まさか紬先輩まで…

唯「ギター弾いてみる？」

律「いいのかい？」

なんだかんだで楽器とりかえっこが始まった。

律「じゃーん！」

唯「おお！」

紬「結構似合ってる!!」

確かに見た目はいいけど、律先輩が超絶ギターソロをやってる姿が想像できない（笑）

梓「なかなか様になってます。」

漣「なんか見慣れないな…」

そして律先輩がギターを弾いてみることになったのだが・・・

唯「（号泣）」

梓「どうしたんですか?!」

なぜかいきなり号泣し始めた。なんで!?

唯「ギー太が浮気したー!（泣）」

これが浮気なのかというつつこみは置いておこう。

梓「自分から嬉しそうに渡したじゃないですか。」

唯「ありがとう。今まで楽しかったわ・・・」

梓「めんどくさい人ですね…」

本当にめんどくさいな…まあ唯先輩らしいといえらしいけども。

律「で、唯先生?!どうすれば?」

唯「えっ?先生!?!」

道「立ち直り早っ!?!」

百面相かよ…

唯「いいよいいよ、教えるよ〜!」

唯先生によるギター講座が始まった。

漣「私はお茶しとくよ。すぐ飽きるだろうし。」

と言つてテーブルのほうにいつてしまった。どうしたんだろう?そ

して俺も漣先輩のところいき、右斜め向かいに座った。

漣「どうした?。」

道「いや、漣先輩こそどうしたのかな〜と思って。」

漣先輩なら律先輩につっこむだろうなと思ったけど。

漣「特に理由はないけど…強いて言うなら、私が唯たちの話聞いてもわかんないだろうし…」

後ろではEコードやらなにやらやっていて。じゃらんじゃらんと音

のそろわない弦を弾く音が聞こえる。俺も最初はそうだったな……と昔のことを思い出していると、いきなり音が止まった。

律「ギター無理かも。」

道「あきらめるの早っ!!」

まだ10分もやってないよ?!

律「なんか色々やることあって大変だな」

そりゃドラムだってベースだってそうだろうに……

律「おみそれしました。」

唯「いやいや。」

さっそく楽器交換ギター編が終わった。

そして次の日。

律「というわけで!今日はキーボードをやるぞ!」

なにがというわけでなのわからないが、昨日の続きらしい。

漣「なにがというわけなんだよ……」

唯「輝けりっちゃんシリーズまだ続いているの?」

道「それシリーズものだったんですか……」

とつつこんでいると、いきなり

律「やっぱ輝いてないとだめかしんない!」

唯「ほえ?」

律「注目されるとキラキラになるんだよ!見ろ!」

と言つて俺たちの後ろを指さす。

さわ子「あーん……ん?なによ?」

道「えええ!?!さわ姉いつから居たの?!いつの間にかケーキ食ってるし!!」

律「ここ最近!担任になってからというもの、さわちゃんは肌もピカピカ、髪もツヤツヤ、なんかやたらと充実してると思わないか?!!」

そしてさわ姉は俺たちにウィンクしてみせる。いらねえ……

さわ子「いや、担任ともなると教壇というステージに立つ回数が

増えるからかしら」

道「教壇^{ステージ}っていうルビはよくないと思うけど…」

あるマンガで、闘い（アメフト）というのをみたことがあるが…

律「あたしもキラキラしたい!!」

漣「で、今日はキーボード…」

そしてキーボードに移ったのだが、なんだか上手いのか下手なのかよくわからない様子だな。ときどき、絀先輩が

絀「新しい曲のイメージがどんどん湧いてくる！」

などとはよくわからないことを言ってたが、気にしないことにした。

そしてだいたい遊び終わった、もとい弾き終わった…と思ったときに漣「面白そう・・・むぎ、私にもやらせて…」

と漣先輩が立ち上がった瞬間、律先輩の口元が不気味にはほ笑んだ。

ボワワアアアアー……!!

といきなり非常に歪みがかかったような、つまり怖い音を律先輩が鳴らす。漣先輩はこういった類のものが苦手なのだ。

漣「りいーっうー……」

そして漣先輩が律先輩のほっぺたをつかみかかった。

漣「そういうのはやめような…」

それに負けじと律先輩もつかみかかる。

律「うるふえー…」

なんだかよくわからない絵になっているが俺たちは見守る。すると

唯先輩が

唯「りっちゃん、ベースはやらないの？」

と聞いた。すると漣先輩の手が止まった。

漣「ベースはだめ！」

唯「なんで？」

唯先輩が疑問に思うのもわかる。ギター、キーボードときたら流れ

的に次はベースだ。

漣「ベースは私。ベース以外はやりたくないし、ベースじゃないとやだし…」

確かに漣先輩がドラムやギターをやっているところを想像したことがない。

漣「低くて深い音色とか、目立たずにみんなを支えてる感じとか、みんなに合わせてベースのライン作るのも楽しいし…」

道「なるほど。」

漣先輩らしいな。俺も共感できるところが多い。

漣「飛び出しすぎないように、でもみんなの音に埋もれないようなそんなベーシストでいたいっていつも…」

縁の下の力もちということだろう。俺が好きな言葉のひとつでもある。

律「知ってるよ。だから漣のベースには手をださないのさ」

とても明るくやんちゃな律先輩でも、漣先輩のことは気にかけてるんだな。この2人は一生離れないだろう。

唯「おー。焼けますな」田井中どの。」

律「いないいな。」

と唯先輩がちやかす。ん？漣先輩が固まっている。

漣「語りすぎた…」

頭から煙がでそうなほど恥ずかしがっている。どうやら恥ずかしすぎて固まってしまったようだ…

唯「あれ？みおちゃん？みおちゃん！」

律「いかん！漣が生ける屍に！！」

道「屍って…」

すると漣先輩が

紬「いいな、ベースって漣ちゃんそのものって感じ。」

梓「私も漣先輩のベース、好きですよ！」

紬「うん！私も。」

俺も！と言いたいたいところだが、正直なところ俺は漣先輩のことをよ

く知らない。まあ時間はあるしゆつくり知っていけばいいか。
唯「ちよいとく、いつまで固まってるんだいこの子は。」

俺が知ってる数少ない零先輩のことは、恥ずかしすぎて固まるとなかなか動かないということだ。まあこれも今日知ったんだけどね。

唯「あ、ねえりつちゃん！」

律「んあ？」

唯「私にまかせといて！大丈夫だからね、りつちゃん！」

と意気込んでいる。

律「なにをまかせると…？」

と小声で呟き、啞然として立っている律先輩だった。

くその日の夜の平沢宅く

カン！カン！カン！

憂「ん？お姉ちゃん何してるの？」

憂が音のする方向をへ行くと、唯が部屋の隅で食器を叩いていた。
（ちなみに憂^{うい}とは、唯の妹である。）

憂「お行儀悪いよ？」

そして唯が食器をたたく手を止めると

唯「こつやつて暗い所で、輝けりつちゃん作戦を考えていたんだよ。」

く

とわけのわからないことを言っている。

憂「え？食器洗っちゃいたいけど…あとでいつか。」

と姉には甘い憂であった。

さらに次の日の放課後。

今日3年生はクラス写真だったらしい。その話を零先輩、紬先輩から聞いていると、唯先輩がやってきた。

唯「みんな！おはよう！」

道「もうそろそろ夕方ですが…」

なぜかテンションが異常に高いようだ。

唯「まだりっちゃん来てないよね？」

梓「きてないですけど…どうしたんですか？」

唯「ふふふ…秘密。」

たいしたことじゃなさそうなので、とくに言及しない。そしてfいきなり律先輩のドラムセットを動かし始めた。

漣「なにしてるんだ…唯。」

唯「りっちゃんが来てからのお楽しみだよ！」

道「なにがお楽しみなのかわからないのですが…」

どうやら昨日まかせて！と言ったことに関係あるようだ。

そしてしばらくすると、音楽室のドアが開き律先輩がやってきた。

唯「おー！これいいねー！」

律「何やってるんすか？」

律先輩が不思議に思うのも無理はない。ドラムセットがやたらと前に移動されているのだ。

唯「あ！りっちゃん！ドラムの位置変えてみた！めっちゃまん中。」

なんでこんな位置なんだろう…

唯「色々考えてみたんだよね。たまには席替えだよ！」

と言って、あせる律先輩の手をとり座らせる。そしてみんなが並び終えると、さわ姉と俺は正面に移る。どう考えてもおかしい配置なのだが、一応説明しよう。左から漣先輩、唯先輩、律先輩、梓、紬先輩という並びだ。どこもおかしくないだろうと思う人もいるが、前列と後列の並びが逆という配置である。

律「はずかしいぞ…」

道「そうでしょうね…」

こんなバンド見た事ねえよ…

さわ子「んゝ…やっぱりこうよね？」

5人「ですよねゝ」

結局みんな元の場所に戻った。

唯「でもねりっちゃん！大丈夫！」

と言っていきなりライト付きのヘルメットを取り出し、明るさ全開で律先輩に向ける。

律「うわぁっ！」

唯「これでりっちゃんを照らしてあげる！」

律「やめろー！！」

唯「輝けりっちゃん！」

律「うわぁー！！！」

そしてさらに近づける。なにやってんだよ…ホントに。

漣「やめろ唯！律が…」

唯「え？」

漣「虫の息だ…」

真っ白になって弱りきっている律先輩…

唯「やってもうた…」

律先輩が回復した後、唯先輩が深刻そうな顔をする。

唯「りっちゃんさ、もしかしてさみしい？」

律「え？なんで？」

唯「いや、いつも後ろだしさみしいのかと。」

ドラムはさみしいのか？確かに後ろだけど…

律「いや、別に。」

と律先輩は否定する。

唯「こういうのはどうかな？」

人の話聞いてないな…

唯「演奏中にもっとコミュニケーションとるの。こういう風に、じやかじやかじゃんじゃん…」

とよくわからないパフォーマンスを繰り返していた。それで演奏がおろそかになったら本末転倒

だろ…。みんなも嫌々やってるな。あ、紬先輩以外。でも今日の唯先輩はふざけているようで真面目だ。なんだかんだ言っって仲間思いなんだな。まあ律先輩はいちいちビクビクしてたけど。

漣「はああゝ」

と唯先輩が深い溜息をついた。

律「唯ゝ、あたし別にそんなつもりじゃあないんだけどゝ」

唯先輩も唯先輩の真剣な態度になぜか腰が低くなる。

唯「ダメだよ。りっちゃんの悩みはみんなの悩みだよ。1人で悩んじゃやだゝ！」

律「だから悩んでないし…」

唯「みんなで乗り越えようね！」

律「もう違うつてばゝ！！（泣）」

唯先輩の頭では、なぜか律先輩がとんでもなく悩んでいることになっているらしい。律先輩、ドンマイです。

その帰り道、唯先輩と梓と俺は帰り道が途中まで一緒なので、3人で歩いてた。

唯「いっぱい持ってきたのにゝ」

いっぱいに入った紙袋を両手で持って文句を言っている。自業自得です。

梓「もう。諦めて持って帰ってください。」

と梓も起こる。無理もない。今日の部活は唯先輩の輝けりっちゃん作戦でつぶれたからだ。

道「俺が持ちましょうか？」

唯「ほんと！？助かるなゝ」

と唯先輩が俺に渡そうとした瞬間

梓「だめですっ！！」

梓に止められてしまった。

梓「これは唯先輩に対する罰なんですから！あと道も甘やかさない！」

唯「あずにゃんひどいよ」

道「はいはい。」

俺は別にいいんだが…ん？待てよ。今梓に名前を呼ばれたような…気のせいかな。

おもむろに唯先輩が立ち止まる。

唯「りっちゃんかドラムやらなかったら私がやろうかな。」

梓「なんでですか？」

唯「りっちゃんなんか悩んでるんだよ。なんだっけ、ほら、スパイクみたいなの。ストライクじゃなくて…」

道「スランプですか？」

唯「そうそれ！」

ストライクって…

梓「ぜんぜん違いましたね。」

唯「でもりっちゃん、ちょっと違うことしてみたいんじゃないかな？」

道「そうですね」

唯「というわけで私がドラム。あずにゃんの後ろでドラム叩くよ！」

うん、やめてほしい。大変なことになるから…

梓「だめです！私の目の届く範囲にいてください！」

唯「ええ…なんで」

梓「先輩考えすぎですよ！」

〳山中さわ子宅・風呂場〵

さわ子はさらに美しくなるべく、風呂場で肌を磨いていた。

さわ子「これでもっとピカピカよ」

これがさわ子に悲劇をもたらすとも知らずに…

〳田井中律宅・自室〵

律は勉強がはかどらず、漑にとりともないメールをしていた。
律「そっぴゃ、ここ数日まともにドラム叩いてないな。自分で言い出したことはいえ。」

確かにここ数日唯に振り回されていた。いい意味で。

律は自分がドラムを始めた時のことを思い出していた。あるバンドのDVDがきっかけということ。最初はスティックだけだったということ。中古のドラムセットを買ったこと。

律は自分の手のひらを見た。

律「（まだちょっと豆になってる。最初はすごい力入ってたから）」

そしてもう一度じっくりと手のひらを見つめた。そしてカバンに刺さっているスティックに目を向けた。

そしてドラムの代わりにテーブルに2冊の本、膝の上に雑誌を置き、叩き始めた。少し夢中になって叩いていると

聡「姉ちゃんうるさ〜い」

と聡（聡とは律の弟のこと）に怒られた。

次の日の放課後、俺が音楽室に行くと、

律「じゃーん！やっぱドラムだよな　！！」

あ、元通りなってる。

漑「ふふっ、だと思ったよ。昨日キース・ムーンのDVD見たって言うってたから。」

唯「だれ？」

道「ザ・フリーというバンドのドラマーですよ。」

漑「律が憧れてるドラマーで…」

梓「ああ！あの変人とか壊し屋とか言われたひとですね！爆竹しかけて家を廃墟にしたことがあるとか。」

律「そこは憧れてないから。」

残念ながら俺はその人を尊敬できない。もつと楽器は大切にしてほしい。

律「でも、ライトが当たなくても、影になつても、足しか映んなくても、やっぱりあたしはドラムが…」

唯「うん！やっぱドラムはりっちゃんだよ！」

律「唯…」

律先輩がいいこと言おうとした気がする…

唯「演奏を始めるとき振り返ると、りっちゃんが元気な顔でスティック叩いて合図してくれるでしょ？そしたらなんかやるぞー！って気になるんだ。」

律「ん…」

律先輩は恥ずかしそうに見える。

唯「それにりっちゃんのおかげで私解ったよ。」

律「えっ？」

唯「同じバンドやってても見える風景も考えてることも違うって。」

俺を含めた周りのみんなも唯先輩を関心ながら見ている。

唯「みんなにはみんなの場所があつて違うけれど、でも」

律「演奏すると一つになるんだよな！！」

唯「そう！」

律「あたしさあ、ここでみんなの背中見ながら、みんなの音聴きながら、がんだらドラム叩くの…大好きだ！！」

そして満面の笑み。みんなが顔を見合わせ笑う。

道「あつ…」

紬「どうしたの？」

道「いや、なんでもないです。」

不覚にもちよつときめいてしまった…

紬「あつ、私もりっちゃんのおかげで新しい曲ができました。」

5人「えっ?!」

紬「りっちゃんが私のキーボード喋らせてくれたから…」

澪「あの時のか…」

想像力豊かなんだろうな…

梓「どんな曲なんですか？」

唯「早く聴きたい！」

そして紬先輩がキーボードをセットして構える。

くく

律「これいいんじゃないか?!」

とてもあのときからできたと思えないほどの曲だ。

唯「これむぎちゃんが弾き語りしたらいいんじゃないかな？」

紬「それステキです！」

漣「うん、いいかも。」

道「楽しみですね。」

律「漣、歌詞たのむな。」

なかなか期待できそうな感じた。よし俺も協力しよう。

紬「あのね、曲のタイトルだけは考えてあるの。」

唯「なになに？」

紬「HONEY SWEET TEA TIME！」

律「やっぱお茶か！」

先輩たちらしいのかな？

そのあとのティータイム。正直俺にティータイムなんて言葉は似合わないの、見てるだけでいいんだが…。とりあえず参加。

唯「はちみつ塗るとおいしーね！このラスク！」

律「なんでも組み合わせっていうか、コンビネーションっていうか…」

梓「唯先輩、口の周りべたべたしてますよ。」

道「律先輩口に物入れながら喋らないでください。」

俺たちは教育係か！

唯「あずにゃん拭いて〜」

梓「いやです！」

「いいながらも拭く梓。

漣「はちみつ色の午後が過ぎてく…」

紬「それ2回繰り返し返したらいいんじゃない？」

漣「いいかも。」

漣先輩と紬先輩は歌詞作りに励んでいる様子…だったが、こっちに向かってきた。さすがに後ろでこんだけうるさくすれば集中できないか。そして先輩たちが戻ってきたところで、

道「今日は大変でしたね。」

律「誰かさんのせいだな。」

みんな一斉に唯先輩を見る。

唯「え？なに？」

梓「なんでもないですよ。」

唯「そう？」

と言つてラスクをほおばる唯先輩。がんばれ梓。

漣「今回は律、大変だったな。」

律「いや、でもみんな私のよさを再確認しただろ？」

道「あ、調子にのつた。」

律「なんだとうー！」

道「今のは冗談です。でも俺は律先輩のドラム好きですよ。」

律「えっ？」

道「どんだん突っ走るし、まだまだですけどね。」

律「うるせえ…」

そしてまたラスクを食べ始める。

唯「あれ、りっちゃん顔赤いよ？」

律「なんでもないよ！」

まあ今回は大変だった（主に律先輩が）けど、少しはみんなのことを知ることができたと思う。

次の日。さわ姉が学校にサングラスとマスクで来たのは学校中のニュースとなった…

第5話（前書き）

どもm（――）m

今回は修学旅行あたりの話です。

あと長いです。

気長にゆっくり読んで下さい。

今回は私の趣味も多少入っていますのでご了承を。

第5話

〔平沢唯宅・居間〕

憂「よいしょっと。これで着替えはよし。ハンカチ・ティッシュよし……」

憂はうきうきした表情でなにか準備をしている。彼女が浮かれるのには理由がある。今日は修学旅行なのだ。そして下ろしていた髪を後ろでまとめ、いつもの髪型に戻す。姉を起こすため階段をのぼった。

憂「お姉ちゃん。起きてー。修学旅行でしょ？」

唯「んあ……」

と返事をしたが、起きる様子はない。そう、今日は唯たち3年生の修学旅行なのである。じゃあ自分で準備しろよ、と思う人は多いだろう。しかしそれは唯が憂を信頼しているからこそなのである。言いかえれば任せきりなのである……

今日から3年生は修学旅行だ。ということは、今日の部活は俺と梓だけということになる……。そのことが前日から気になって気になってあまり寝ていない……。

道「なんとかなるだろ……たぶん。」

そう自分に言い聞かせて家を出た。めずらしく俺の右手にはギターケースがある。父さんから借りているアコースティックギターを持ってきたのだ。さすがに何かもっていかないと梓に何か言われそうなので一応持っていくことにした……。そうやって不安になっていたところ、後ろから知っている男が走ってきた。

齊藤「おう……！」

うわ……テンションたけえ……

道「おう……」

齊藤「なんだなんだ?! やけにテンション低いじゃねえか! なんかつたか!? おつ、めずらしいな! お前がギターもってくるなんて! なんかつたか! ?」

道「一度に2つも質問するな!」

なんかあつたか?! が2回もあつたぞ…

齊藤「わりいわりい。で、そのテンションの低さはどうしたんだ?」
道「まあいろいろとな…」

齊藤は俺の表情を見て悟つたのか

齊藤「お前も大変なんだな…」

慰めてくれるのか… 齊藤よ…

そして1時限目の休み時間。唯先輩からメールが来ていた。

『今、富士山の中 新幹線が見える』

そして富士山の写真が貼り付けてあつた。

おそらく『今、新幹線の中 富士山が見える』

と打ちたかつたのだらう。すでにテンションMAXのようだ。

そして昼休み。俺が購買に向かうと唯先輩の妹、隣のクラスの人、梓が購買の横で何やらよくわからないことをしている。ん? あの隣のクラスの人が持っているのは… 幻のゴールデンチョコパンではないか! いつもは3年生が先に買ってしまうので見るのも初めてだ…。でも、俺は甘いものが苦手なので見るだけでいいのだが。そうやって3人を見ていると、梓と目が合ってしまった。これは声をかけるべきだな…

道「おう梓! お前も昼飯?」

梓「こんにちは。で、憂。唯先輩からメール?」

…………… 終わりかよ! 今のは結構なダメージだったぞ…。そうやって軽く絶望していると、唯先輩の妹さんが話しかけてくれた。

憂「あの… もしかして道くん?」

道「なんで俺の名前を?」

憂「梓ちゃんからいつも聞いてるよ。新入部員が入ったって。」

なんだ、梓は俺のこと一応気にしてくれてるのか。ちょっと安心。

憂「私は憂っていいいます。よろしくね。」

道「こちらこそ。」

優しい。これがあの唯先輩の妹なのか…

純「私は純^{じゅん}。よろしく！」

道「よろしく。」

いい人たちだ…あれ？なんだか心の傷が癒えていくよ？

梓「憂、純！そんなのと話してないで行くよ！」

と言って梓は2人の手を引いて行ってしまった。そんなのって…そんなのって…（泣）

そして俺は一人さみしく教室に戻った。

（梓、憂、純 side）（以降3人 side）

純「あれが道くんか…」

梓たち3人は音楽室で昼食をとっていた。

憂「純ちゃん気になるの？」

純「だって道くんかっこいいじゃん！」

実は道は二枚目な顔立ちをしているのである。

純「梓はどう思う？」

梓「別にどーでもいい。」

道が聞いたら四つん這いになって泣き叫ぶだろう。

憂「梓ちゃんは道くんのこと嫌いなのか？」

梓「嫌いっていうかなんていうか…好きになれない。」

純「じゃあ嫌いじゃん。」

梓「嫌いじゃないよ！」

純「じゃあ好きなの？」

梓「好きじゃない！」

と乙女チックな話をしている。道はクラスの男友達と『女性のどの部分が好きか？！』という議題で熱く討論しているというのに…。

梓「そういえば憂。今日は唯先輩いないけど大丈夫なの？」

しつかり者の憂ならそのくらいは…と誰もが思うだろう。

憂「え…？あ…今日お姉ちゃんいないんだった…」

どうやら忘れていたようだ。そして涙ぐむ憂。憂はお姉ちゃん大好きっ子なのだ。

純「泣かないで憂！今日遊びに行つてあげるから（汗）」

梓「なんならとまりに行こうか？！」

2人のがんばりの甲斐あつて、なんとか憂は泣かずにすんだ。そのかわりに梓と憂は純が所属している『ジャズ研究会』を手伝いに行くことになった。

そして放課後。

道「さあ部活だー！」

なぜ俺のテンションがこんなに高いかつて？今日の昼休みに俺たちのクラスで開催された『女性のどの部分が好きか？！』という討論対決で、齊藤たちに勝ったからだ。何と何で討論していたかは秘密だ。しかも今日の俺はギターを装備している。もう鬼に金棒だ！！そして階段をのぼり、音楽室の前まできた。

道「よし…」

俺は決心してドアを開けた。

道「おう梓！久しぶり…あれ？」

誰もいなかった…。いつもなら梓が一番乗りで来てるはずなのに。

梓のクラスに行つても梓の姿はなかった。

道「今日は2人だけだから帰ったのか？」

それはそれで大変シヨクなのだが、この可能性は大いにある。本格的に危機感を覚えたので、本気で探してみることにした。

道「いない…」

15分ほど走り回つて探してみたが、どこにもいない…。俺本格的

に嫌われた……？と絶望に浸っていると、ジャズ研究会の部室から女の子がいきなり飛び出てきた。ちらっと見ただけだが、その子は昼休みに合った純という子だった。

道「かなり慌ててたみたいだな……」

そしてドアの前を通りすぎようとしたとき、聞き覚えのある声があった。

梓「あ……」

憂「ごめんなさい。私たち純ちゃんの友達で……」

これは梓と憂ちゃんの声だ。こんなところにいたのか。よかった、帰ってなくて。すると後ろから肩を叩かれた。振り返ると、さつきジャズ研の部室から飛び出ていった子だった。

純「道くんだね？どうしたの？」

道「いや、梓探してたら声が聞こえたから。」

純「あ、そつか。道くんも軽音部だもんね！じゃあ入って！」

と促されるままにジャズ研の部室に入る。

純「おまたせ！あつ、ちょうどよかった。」

1年女子「おはようございます！」（以降1女）

純「おはよう。」

梓「純。なんでそいつがいるの……？」

純「梓探してたみたいだったから連れてきた。」

道「お……おう梓。」

梓「……はあ。別にいいけど。」

よかった……！なんとかなった……！神様ありがとう。

純「梓、悪いけどこの子たちにギター教えてあげて。」

梓「わかった。」

1女「よろしくお願いします……！」

梓は後輩になにか教えるというのが初めてらしい。俺もないけど。

純「で、道くんはギターは弾けるみたいだけど、他には？」

道「まあベース、ドラムはだいたいできるけど……」

純「ほんと？！やって見せてよ！」

断る理由もないし、やってやるよ！と意気込んでいると梓が手を止めてこっちに向かって言った。

梓「純、一応言うけど自信なくして楽器やめたりしないでね。」
「といってギターレスンに戻ってしまった。」

純「…？まあいつか。じゃあ持つてるギターからやつみて！」

道「了解。」

そう言つて俺はギターケースからギターを取り出す。そしてチューニングをしていると、梓がこっちにきた。

梓「ストップ！そのギター見せて！」道「いいけど…なんで？」

梓「いいから！」

そしてギターを手渡す。どうしたんだろうか。そして梓はヘッドを見た瞬間、目を丸くした。梓「なんであんながこんなもの持つてんのよ！」

憂たちはぼかんとしている。

梓「これGIBSONのD-45でしょ?!」

道「いかにも。」

梓「はじめて見た…」

梓は驚愕の表情を浮かべている。

道「父さんが知り合いから譲ってもらったらしいんだけど、俺も調べたときびびったよ。4、500万するんだよなそれ。」

さすがに周りもその値段を聞いて驚いたような表情をしている。

純「ありえないわ…」

道「まあそれだけあって音は保障するよ。梓弾いてみる？」

梓「い…いい。」

道「ならいいんだけど。」

そしてチューニングを続ける。

道「よし、終わったよ。なに弾けばいい？」

純「なんでもいいけど…すごいやつ。」

すごいやつ？

道「トミエマとかでいい？」

純「トミエマって何？」

梓「トミー・エマニユエル。オーストラリア出身のギタリストだよ。フィンガリング・ピッキングの達人って呼ばれてる人。」

純「ふーん…よくわかんないや。とりあえずお願い。」

よし。一発かましてやりますか。

くく

道「どうよ！」

パチパチと拍手が聞こえてくる。梓以外の。

憂「道くんすごいね…私感動しちゃった。」

道「どーもどーも。」

素直に喜ばれるのがこんなに気持ちの良いことだったなんて…

1女「……………」

純「こら自信喪失しないの！私でも耐えてるのよ（泣）」

1女「先輩、目に涙が…」

まあこんなもんだろ。やっぱオーディエンスがいるっていいな。

梓「調子にのるんじゃないわよ。さ、もう一回頭から教えるから…」

そういつて梓は再びギターレスンにもどってしまった。俺涙目。

憂「元気だして。自信もったほうがいいよ。」

純「そうそう。めちやくちゃかつこよかったし！！！」

道「ありがとう…。」

憂「でも本当に感動しちゃった。お姉ちゃんに聴かせてあげたかったな…」

なんて心の優しい子なんだ…。俺の心の天使だな…

純「なんで梓は道くんのこと嫌ってるんだろうね。」

道「なにかした覚えはないんだけど…」

憂「じゃあ今日ちゃんと聞いてみるね。」

道「よろしくお願いします。」

そして部活が終わり、俺は一人で帰り道を歩いていたところ、携帯

にメールが来た。

道「だれからだろう…えーと、送り主は純さんか。」

そういえば今日は憂ちゃんと純さんとアドレスを交換した。女の子のアドレスが2つも増えるなんて…。今日は最高だな…。そして内容をみる。

純「今日はありがとう。またいつでも来てね。」

という内容だった。いきなりだが、どうして女の子のメールは絵文字が大量に使われているんだろうか…。それはさておき、メールを返信する。

道「いやいや 純さんが中に入れてくれなかったら大変なことになるってだよ（笑） 送信っと。」

するとすぐメールが返ってきた。女の子はメールを返すのも早い…。純「純でいいよ（笑） それと今日は憂の家に梓とおとまりにくんだ！」

へえー、うらやましいな……

道「楽しんでね！ じゃあまた今度」

純「ばいばい！」

女の子とメールするなんて久々だったから緊張した…。あ…明日何しよう…

（平沢憂宅・3人side）

憂は自分の作った料理をテーブルに並べる。

憂「よし。」

今日は梓と純がとまりにくるのでとても張り切っていた。そのためか、乗っている皿はテーブルからはみ出しそうなほど並んでいる。

憂「少ないかな？」

逆に多いだろ！とつつこみたいところだが、姉がいないせいかなそれに気付かないようだ。そしてちょうどよくチャイムが鳴った。

純「ごめんください。」

憂「はい。」

そして憂がドアを開ける。

純「こんばんわー！」

憂「いらっしゃーい！」

純の左手には大きな箱があった。それがオレンジ色の星のマークのついた袋に入っていた。

純「これ、つまらないものですが…、どうぞお納めください！」
と言ってその箱を手渡す。

憂「ありがとう！あつ、これドーナツ？」

純「うん。スーパーオールスターパック。一度買ってみたかったんだ。」

つまり全商品入ってますよ、というパーティー用のパックだ。ちなみに道はドーナツを2個食べると胸やけを起こすらしい。

憂「へへ、かわいいね。あつ、そうだ！」

と言って純を居間につれていく。そこにはテーブルに所せましと並べられた料理の数々…

純「す…すごい…」

憂「今日は3人だから多めに作ってみたんだ。…足りなかったらちらし寿司とピザもあるから。」

純「足りる！十分足りるから！」

するとまたチャイムがなった。おそらく梓だろう。

2人「あつ…」

そして玄関まで行き、ドアを開けた。

梓「こんばんは。」

憂「いらっしゃーい！」

梓「これ…つまらないものだけど…」

純「な…中身は？」

梓「え？お寿司だけど…」

純「ドーナツ遠のいた！」

スーパーオールスターパックも寿司には勝てないようだ。そもそもドーナツと寿司では勝負のジャンルが違うのではないかと思うのだが…

梓「ふう〜…」

純「食べ過ぎたー！」

と言つて純はそのまま倒れた。他人から見ればはしたないことだが、今日は女の子しかいないので気にしていないようだ。

梓「もうはいらない…」

あれだけの量と寿司を食べれば男だって腹いっぱいになるだろう。

梓「ん？」

梓がドーナツの入っている箱を見ると、すべてのドーナツが一口だけ食べられていた。

梓「どういう食べ方してるの…」

純「だって味確かめてみたかったんだもん…」

ごろごろしながら純が言った。女の子にしかできない食べ方だ。

純「梓、あと食べていいよ。」

この発言はどこか譜に落ちないのだが気にしないことにしよう。

梓「……入るわけないでしょ。」

純「甘いものは別腹だよ。チョコのやつとか…おいしいよ。」

梓「ん……」

誘惑に負けてドーナツに手を伸ばす梓。そこにちょうどよく憂が洗い物をすませて帰ってきた。

憂「食べるの？」

梓がドーナツを少しだけかじる。

梓「……甘い。」

と梓がそう言った瞬間、憂のケータイにメールが来た。

憂「あ、お姉ちゃんだ。」

梓「どれどれ？」そこには紬が律に枕を投げている写真が貼ってあ

った。それを見て2人は笑う。

憂「修学旅行って感じだね。」

梓「憂たちもおとまり楽しんでる？」

と書いてあった。そして梓は寝転んでいる純を見た。

純「なに？」

と言つて2人のほうにごろごろと転がってきた。勢いあまつてか、梓のおでこに純のおでこが当たってしまった。

梓「いたっ……」

憂「大丈夫……？」

楽しいことにはアクシデントはつきものである。

梓「寝ちゃった……」

憂「よく寝てるね。」

一番乗りで純は寝てしまった。それも憂のベッドで。

憂「じゃあ私たちも寝よっか。」

立ち上がって電気を消そうとする。

梓「まだ眠たくないよ……」

憂「じゃあお布団でお話しよっか。消すよ？」

そして憂は電気を消した。

梓「唯先輩たち、きつと今頃楽しんでるんだろうな……」

憂「もう寝ちゃってたりして。」

梓「それはないよ。合宿の時とか、みんな遅くまで遊んでたし……」

などと先輩たちの話をしていた。唯からのメールが送られてきた以外はとりとめのない話で時間が過ぎていった。少しの沈黙のあと、憂がとうとうあの話題を切り出した。

憂「梓ちゃん。なんで道くんのこと嫌いななの？」

梓「い、いきなりどうしたの?!」

梓が驚くのも無理はない。憂は今までの口調と違い、えらく真面目なトーンで話し始めたからである。

憂「今日の梓ちゃんと道くん見てて気になったの。」

梓「昼休みのときに言っただじゃん。」

憂「本当は？」

梓「本当って…？」

憂「本当はあんな理由じゃないんだよね？」

梓「……なんでそう思うの？」

憂「梓ちゃんのことだったら分るよ！だって梓ちゃんは…大切な友達だから。」

梓「憂……わかった。言うよ。」

そうして梓は本当のことを言う決心をした。

梓「今年の部活動勧誘のときにね、私たち着ぐるみ着てやってたでしょ？」

憂「うん。」

あの動物を模したまったく可愛くない着ぐるみのことである。

梓「誰もチラシもらってくれなくて悲しかったなあ…」

実はあのチラシを受け取ったのは道だった一人なのである。

梓「でも楽しかった。5人だけでも別にいい思ってた。」

もともと梓は新人部員が来なくてもよかったのだ。

梓「でもあいつが入部してきた。私も最初は嬉しかった。でもあいつが入ったら軽音部が変わっちゃう気がして…」

憂「不安になったんだね。」

梓「うん…」

それから梓は話し続けた。話していくうちに、自分の道に対する気持ちが変わっていく気がしたからである。そしてさんざん文句を言い続けた後、梓は恥ずかしそうに付け足した。

梓「でも…ギター私より上手いのは尊敬してる。あとちょっとカッコいいかな……」

憂「え？最後のところなんて言っただの？」

梓「だから…その…」

憂「教えてよ」

梓「ギター弾いてるときカッコいいなって言っただの！！もう寝る！！」

と言つて憂と反対の方に寝返りをつつてしまった。道が聞いたなら『地球に生まれてよかったー！！』と言つて全力で喜ぶだろう。

憂「梓ちゃん。明日どつかが行こうよ。どこ行きたい？」

憂は少しだけにやにやした表情で梓に聞いた。

梓「動物園がいい。」

と反対を向いたまま答えた。

憂「いいね、動物園。じゃあ明日晴れるといいなあ。おやすみ。」

梓「おやすみ。」

憂「（道くんにはいい報告ができそうだよ。よかったね道くん。）」

実はベットで寝ていた純が起きて、一部始終聞いていたことは秘密である。

次の日。

外は土砂降りだった。

梓「土砂降りだね。」

憂「これじゃあ動物園は無理っぽいね……」

梓「あゝあ、行きたかったな……」

梓は残念そうにソファーに寝転んだ。

梓「純、なんかすることない？」

純「うん。」

梓「どつかが行きたいところとか。」

純「うん。」

梓「ゲームとかでもいいよ。」

純「うん。」

純がなぜ「うん」しか言わないのかというと、漫画を読んでいたからである。

純「憂、これの6巻ってある？」

憂「え？どうだったかな」

梓「友達ん家でそれやってると、友達なくすと思う。」

梓の言葉も気にせず、純は6巻を探しに、唯の部屋に向かった。

憂「あつ、あつた。はい7巻。」

純「欲しいのは6巻だよ。」

憂「でもここから先しかないよ？」

梓「1冊くらいいいじゃん。」

なかなか適当な発言のような気がする…

純「読んでみようかな…ダメだつ。本屋さん行こう！」

梓「でもまだ土砂降りだよ？」

純「え…、なんか一気にやる気なくなった。」

と言つて唯のベットに倒れこんだ。すると梓の携帯に唯からメールが届いた。

唯「あずにゃんたちは なにしてるのー？」

梓「やっぱりどつか遊びに行こう！」

純「すー……」

いつの間にか純は唯のベットで眠っていた。

梓「寝付きよすぎ！！」

その後は、バッティングセンターに行ったり、部室のすっぽんもどきに餌をやるのを忘れて学校に行ったり、そのまま曲を演奏したりして過ごした。

そしてその帰り道。純はバスに乗ろうとしたところで、

純「梓、がんばりなよ！！」

梓「は？」

そしてドアが閉まり、バスは走っていった。

梓「？」

隣にいた憂をみると、くすくす笑っていた。

3人Side・終

次の日。

俺は校門を通り、校庭を歩いて玄関に向かった。

道「今日は先輩たちが帰ってくる日だな…」

ここ3日間部活がなかったので、久しぶりの部活になる。楽しみ半分、不安半分…と一喜一憂していると、横切る女子生徒からあいさつをされた。

？「おはよう。」

俺にあいさつするなんて先輩が、憂ちゃんか、純の誰かだろうな。

道「おはよ…」

そう言いながら声の方を向くと、そこには黒髪ツーサイドアップの女の子がいた。

道「あ、あずさ…？」

あいさつをするやいなや、梓は早足で玄関まで行ってしまった。

道「え……………」

俺は立ち止まってしばらくの間、固まってしまっていた…

第6話（前書き）

年末の忙しさになかなか手を付けられずちょっとばかり遅くなりま
したm（――）m

第6話

先輩たちの修学旅行から数日。部活もいつも通り活動している。活動しているといってもお茶飲んでお菓子食べておしゃべりしているだけなのだが…。律先輩曰く「時差ボケ」らしい。たかが京都行っただくらいでなるかー！とつつこんではみたものの、治る気配なし。しかも律先輩ならまだしも、漣先輩まで…。

話は変わるが、最近で変わったことがある。梓と（前と比べて）よく話すようになったことだ。好きなバンドについても話したな…。俺のややアウトロー気味なインディーズバンドの話についてこれたのは正直驚いた。もうひとつは、俺のバッグに新しいストラップが付いたことだ。どんなストラップかって？簡単に説明すると、とってもかわいいティーカップの絵がついた携帯クリーナーのクリーナー部分がないやつ、だ。色はブラウン。さっきも言ったが、とつてもかわいい感じなので俺のバックで一際異彩をはなっている。でもなんでそれなの？と疑問を持っている人のために説明しよう。話は何日か前にさかのぼる…

先輩たちが修学旅行から帰ってきた日の放課後。終了のチャイムが鳴ると、そうそうに先輩たちに部室に呼び出された。行ってみるとすでにお茶の用意ができており、そこには梓もいた。

唯「みつちゃん久しぶり！！元気にしてた？！」

道「まあなんとかやってましたよ。」

律「私がいなくて寂しかったんじゃないのか？」

道「ははっ、まさか（笑）」

律「こんにやろー！！」

いつもの会話が始まった。この会話になつかしさを覚えていると、梓が話を切り出した。

梓「で、話ってなんですか？」

俺も気になっていたところだ。普通に部活をやるならわざわざ教室まで迎えにこないだろう。

律「ふっふっふ。聞いておどろくなよ……」

紬「2人にお土産買ってきたの」

律「あー！盛り上げようと思ったのにー！」

漣「いや、普通に言えよ……」

さらつと律先輩の前フリを流す紬先輩。あいかわらずだな……。

唯「はい、あずにゃんはこれ。みつちゃんもこれ。」

とそれぞれに渡された。ぱつと見携帯ストラップのようだが……。

梓「えーつと……『ぶ』？」

梓のは『ぶ』という字がついたものだった。ちなみに俺のはティークップの絵だった。

道「なんですかこれ？」

俺が質問すると先輩たちはそろって顔を見合ると、制服のポケットから何かを取り出した。

唯「いくよ。せーのっ。」

唯先輩の合図で4人がそれぞれストラップを机に置く。唯先輩が「ん」。律先輩が「け」。漣先輩が「お」。紬先輩が「い」。

梓「あつ……これって……」

梓はどうやらこれの謎に気付いたようだ。俺もなんとなくだが気付いた。そして律先輩がおもむろに立ち上がった。

律「『おけぶいん』！桶を愛する部員のことだ！」漣「違うだろ！……」

律「『いぶおんけ』！東北地方に生息する妖怪の名前だ……！」

漣「それも違う……！」

律「なに……じゃあ次は！」

梓「けいおんぶ……」

とても小さな声で梓が言った。そういうと先輩たちは梓のほうを向いて笑顔になる。

なーるほど、上手いこと考えたな。5人が別々の文字で、5人そろったら「けいおんぶ」になるわけだ。

さすが先輩たちだな……………ってちょっと待てよ。じゃあ俺ってなに？なんでティーカップ？確かによくお茶飲んでるし、なんとなく関連してる気もしないこともないけど…。もしかして俺…………あまつた？

俺は考えるのをやめて、部室の片隅で現実逃避することにした。

「道、現実逃避中」

唯「いやゝ結構考えたんだけどねゝ、これにしたんだゝ。かわいいでしょ？」

律「漣が『お』じゃないといやだっていうもんだから…」

漣「そんなこと言ってないだろ！！」

梓「先輩たち、ありがとうございます！」

紬「喜んでもらえて嬉しいわゝ。あれ？…そういえば道くんは？」

漣「そういえばどこに行ったんだ？」

道「（ずーん）」

まさにそんな音が聞こえてくるくらい、ネガティブオーラがまわっていた。

律「よくみたらあんなところに！！」

漣「かなり落ち込んでるな…」

紬「そういえばちゃんと説明してなかったわねゝ」

このままでは道は人間として立ち直れなくなる。全員がそう思った瞬間だった。

唯「おい、みっちゃーん。説明するからこっち来てー！」

呼ばれたので、立ち上がってとぼとぼ先輩たちのもとへ向かった。道「なんでしょうか…………（泣）」
もはや立っているので精一杯な精神状態だった。クソ、鬱だ、死の

う…。

唯「実はね、それにもちゃんと意味があるんだよ。」

道「ほんとですか?!?!」

唯「本当だよ。」

溺れるものって、本当に藁をもつかむんだな…

唯「今さらだけど、みっちゃんが軽音部に入ってくれてとっても嬉しいんだ。だって私たちが卒業したら

あずにゃん独りぼっちになっちゃうところだったから…」

確かにそうだな…。もっと早く入ってれば良かったんだろうけど。

唯「みんなみっちゃんに感謝してるんだよ。だからさ、感謝のしるしと、これから放課後ティータイムの一員でいてほしいって気持ちをこめて、みっちゃんにはこれにしたんだ。」

道「唯先輩……」

俺ってバカだな。先輩たちの気持ちも考えず勝手に落ち込んだりして…。

道「俺…これ大事にします。」

俺がそういうと、みんなは安堵の表情を浮かべた。

紬「じゃあみんな、お茶にしましょう。」

そして俺たちはいつもの軽音部に戻った。

と、いうことがあったわけだ。思い出すとちょっと恥ずかしい…。

そんなこんなで軽音楽部は復活!!先輩たちの「時差ボケ」も治って幸先のよいスタート!!…といきたいところだったが、そんな俺たちを待っていたのは梅雨だった。ちょうど最近梅雨入りしたらしい。なんてタイミングの悪い…。しかもギターにとって梅雨は最悪の季節だ。湿度とかいろいろ面倒になるんだよね…。そんな憂鬱な日の放課後、部室に全員集合でお茶を飲んでいた。

律「いやー、今日唯のやつがびしょ濡れで教室に入ってきたときはびっくりしたよ…」

唯「あれはギー太を守るためだったからしかたなかったんだよ！」
ちなみにギー太とは唯先輩のギターの名前である。

道「自分がびしょびしょになってどうするんですか……」

梓「でも自分を犠牲にしてギターを守ったんですね！すごいじゃないですか！」

唯「えへへ……ほめてほめて」

漣「次からちゃんとビニール巻いてこいよ。」

唯「了解しました！！」

今日も唯先輩は相変わらずである。

漣「梓は大丈夫だったのか？」

梓「私は大丈夫です。ギターケース用のレインコート持ってるので。」

唯「そんなのがあるの?!」

梓「ネットで買ったんです。3000円が1980円で、ギター用の乾燥材も付いてきたんですよ。それから……」

と梓はネット通販で買った便利グッズの紹介を始めた。壁にくっつく肉球の形のギターハンガー、指が大きく開くようになる強化グッズ、などなど……。

漣「梓……それ全部役に立ったか？」

梓「……」

役に立たなかったものが多いみたいだな……。

道「……………（笑）」

梓「なに笑ってんのよ!!」

道「ごめん、なんか面白かったもんで（笑）」

梓「また笑ったー!!」

実は梓って面白い子なのかもしれないな……。

律「……ふと思ったんだけどさ、梓と道なんかあった？私たちがいない間に。」

紬「私もそう思ってたの……。ずいぶん仲良くなったなーって。」
俺自体なにかあった覚えはない。強いて言うならジャズ研の時ぐら

いだな…。

梓「な、なんにもないですよ…ははは…」

梓、激しく動揺。どうしたんだろうか。

漣「別にいいことじゃないか？」

唯「みっちゃんにあずにゃん取られちゃうー！」

道「取りませんよー！」

どちらかというと「取れません」が正解だな…。そんなことを思っている、律先輩が耳元で回りに聞こえないような声で話しかけてきた。

律「（よかったな、仲良くなつて。）」

道「（いや、まだまだですよ…）」

律「（でも本当になんにもなかったのか？）」

道「（そのはずなんですけどね…）」

律「（とりあえずがんばれよ）」

そう言つて律先輩は先輩たちとの話に戻つていった。いきなりなんだつたんだろうか…。まあ俺と梓の仲がよくなった理由を単純に知りたかつただけだろう。

唯「はっ?!」

漣「どうした?!」

唯「ギー太にカビとか生えてたらどうしよう…」

梓「確かにこの季節は油断していると危ないですね。」

俺の知り合いのギターがそうなつたと聞いたことがある。かなりやばいらしい…。そんなことを思い出していると、律先輩がニヤリと笑い漣先輩にささやく。

律「漣、ケースを開けたらカビだらけ。」

漣「ひいひいっ!!!」

たちまち漣先輩の顔が真っ青に。律先輩、やめてあげて下さい。

唯「こんなことしてる間にギー太にカビが生えたら…」

と言うと、唯先輩は立ち上がりギターケースの元へかけよつた。道「そんなに急がなくても…」

唯「待つててね！ギータ！！」

たかが2、3メートルの間にも壮絶な物語があつたらしい…。そしてそーっとギターケースを開けた。中は特に変化もなく唯先輩のギターがあるだけだった。

唯「危なかった…」

梓「なにが「危ない」なんですか…」

紬「よかつたわね、唯ちゃん。」

梓「でも弦に錆びがありますね。いつ変えたんですか？」

唯「2か月前くらい。」

梓「じゃあ変えたほうがいいですね。」

そいつて弦の張り替えが始まった。この作業が楽しいという人がいるらしい。正直言つて、俺はあまり好きじゃない。だから値段は少し高いが長持ちする弦を使っている。

漣「そういえばさ、道の家にはたくさんギターとかあるんじゃないか？」

道「たくさんかどうかはわかりですけど、ありますよ。ほとんど親父のですけど。」

漣「どういう風に保管してるのかなって思つてな。」

なるほどな。でもこの話を聞いたギターを知らない人は大抵引くんだよな…。

道「実は俺の家にはギター部屋というのがあるんです。」

漣「いいな！私も欲しい！」

ここまではいい。ギター部屋を持っている人なんてたくさんいるかな。

道「その広さなんですけど…この部屋くらいあるんですよ…」

漣「それは…すごいな…」

ほーらね。

律「ちよつとしたギターショップだな…」

道「しかも設備も完璧。加湿器、乾燥機、冷暖房、その他諸々…」

漣「お前の父親つて何やつてる人だっけ？」

道「菓子職人です…」

恥ずかしい、死ぬほど恥ずかしい…。

道「でもそのおかげで俺も不自由しなくて済みますよ。」

紬「いいお父さんじゃない。」

道「そうですかねー…」

そういった会話をしているうちに、唯先輩の弦交換が終了したらしい。

唯「やっと終わった…」

切った弦やら袋やらを床に散らかしたまま、唯先輩は床にぐでつとしていた。

漣「ほら唯、練習するぞ。雨も止んでるし、いい気分で…」

唯「ほんと?! よし、帰ろう!」

梓「練習するんじゃないんですか?!」

唯「ギー太が濡れちゃうよ!」

じゃあ何のために弦変えたんだよ…とつつこもつかと思ったが、俺も雨が降る中歩いて帰るのはしんどい。今日ばかりは唯先輩に賛成だ。そうして唯先輩に押し切られる形で今日の部活は終了となった。

次の日もうんざりするほどの雨。学校の中は湿度150%!と言わんばかりの湿気だった。

道「(唯先輩も今日はさすがにビニール巻いてきただろ…)」

そう言いながら部室へと向かった。

道「どーもっす。」

軽く挨拶をして部室へ入ると、他のメンバーは全員来ていた。しかしなぜか唯先輩は床に座っていた。しかも唯先輩の回りだけ水色になっていた。

道「なにしてるんですか…」

唯「ビニールが上手く取れない…!」

泣きながらビニールと格闘している。

道「唯先輩、実はですね、世の中にははさみという道具があるんで

すよ。それを使ったほうがいいんじゃないですかね？」

唯「あ、そっか。みっちゃん頭いい」

この人やベーよ！社会に出てから絶対通用しねーよ！と心の中でつつこんでいると、漣先輩がやれやれという表情で目頭を押さえていた。

唯先輩がビニールを取り終えると、さっそく練習が始まった。

道「なんか、先輩たちが楽器持つてるの見るの久しぶりですね…」

漣「うっ……心が痛いなそれは…」

律「なに言ってるんだ！一応軽音楽部だぞ！」

梓「一応ってなんですか…」

唯先輩と紬先輩はともワクワクしている。いいな、楽しそうで。

今のこの部活の練習方法は、とりあえず1曲やって、それに俺が感想を言ったり、具体的にアドバイスしたりといった練習だ。ちなみにランキング1位は「律先輩走らないください」だ。

律「いや〜久々にがつつりやったな！」

唯「疲れた」

俺としても今日は内容のある練習になったと思う。夢の武道館まではまだまだだが…。

紬「まだ雨降ってるわね…」

道「なんとかありませんかねー…」

今日は湿気が多すぎて廊下で転びそうになって恥ずかしかった…。

漣「今日はベース置いていこうかな。」

梓「それがいいと思います。」

確かにこの雨の中で濡らさずに帰るといふのは至難の業だろう。

唯「ひどいよ漣ちゃん！！かわいいそうだよ！！」

漣「だってこの雨だし…」

唯「かわいそうにエリザベス…お前は今日置いてかれるんだよ…」と立てかけられた漣先輩のベースに話しかける。

漣「勝手に名前つけるな！！」

ベースだからエリザベスか…。

律「というかお前も置いていったほうがいいぞ…」

唯「なんで？」

律「だってビニールがあれじゃあな…」

唯先輩のビニールは壁側の机の上に3分の2ほどぐしゃぐしゃになって散らかっていた。

唯「う……ごめんよギー太。さびしいだろうけどエリザベスと仲良するんだよ。」

道「ただけ寂しいんですか…」

唯「知らない人に声かけられてもついていつちゃダメだよ!」
梓「……………」そして俺たちはそれぞれ帰宅した。

次の日の朝、学校の廊下をダッシュで駆け抜ける唯先輩を目撃した。
齊藤「あれってお前の先輩じゃね？」

道「聞くな……………」

なにやってんだよ唯先輩……。大体どこに行くかはわかってはいるが……。

朝のHRが終了し、廊下に出たところでこそそしながら歩いている
漣先輩を見かけた。

道「なにやってんだろ……ついていってみるか。」

そうしてついていくと、音楽室に到着。

道「なるほどな。」

おそらく唯先輩がギターを置いていったことをすごく心配していたので、自分も心配になってしまった、といったところだろう。漣先輩は音楽室に入って行った。開けっぱなしのドアからのぞこうとすると、後から先輩たち3人が来るのがわかった。

律「(なにやってんだよ、道)」

道「(いや)、面白いものが見れそうだったんで)」

こそそと話していると、漣先輩に動きがあった。漣先輩はギター

ケースを開けてほつとすると、中からベースを取り出した。

漣「……エリザベス……」

そして頬ずりをした。律先輩は笑いをこらえるので精一杯のようだ。

漣「ん？」

あ、気付かれた。

漣「ギヤアアー！！！」

律「あーばれちった。」

漣「なんでいるんだよ！てかなんで道までいるんだよ！！」

道「いや、つい。」

唯「漣ちゃんかわいい」

紬「ふふふ」 漣先輩は顔を真っ赤にして恥ずかしがっている。確かに可愛いかな…。

こんな感じで軽音楽部は活動している。

しかし第2の試練が俺を待ち受けていようとは思ひもなかった…

……

第6話（後書き）

今回はアニメ6話にそった話でした。
次回はオリジナルでいこうと考えてます…

第7話（前書き）

あけましておめでと〜ございますm（―）（―）m
今回はオリジナルです。

第7話

道「……………」

澪「……………」

カチカチと時計の秒針の進む音がうるさいぐらいに響いている。実は秒針には音量を調節するところが付いていて、誰かが秒針の音量を上げたんじゃないか、と錯覚するくらいにとっても静かだった。

道「あの…澪先輩。」

澪「な、なんだ道。」

道「いやっ、あの……なんでもないです…」

そうか、と澪先輩は言った。そしてまた訪れる静寂。

今は放課後。そして部室にいる。それだけならばいつもとなんら変わりないのだが、今日は少し、いや、かなり違った状況に置かれている。いつもこの軽音部をにぎやかにしてくれる唯先輩、律先輩の姿は見当たらない。その先輩たちにツツコミを入れる梓の姿も、それを見てニコニコしている紬先輩の姿もない。

そう、この部室には俺と澪先輩の二人だけなのである。まずはなんでこんな状況になったのかを説明しよう…

道「いつてきます。」

そう言っただけで家の玄関を出る。空は雲ひとつない快晴。先週まで続いていた梅雨が明け、ここ最近は夏を感じさせる天気になってきた。

道「今年も暑くなるな…」

そう呟きながら通学路を歩く。今日俺の背中にはギターケースが背負われている。しかし入っているのはギターではなくベースだ。今日の朝になぜか突然持っていく気になったのだ。本当になぜかは分

からない。そんなことを考えていると、後ろからあの男がやってきた。

齊藤「おーっす！」

道「おっす。」

齊藤「おっ、今日はベースだな？」

道「よくわかったな。」

それにしても、なぜこいつは俺が楽器を持ってきたときに限って会うんだらうか…。

そうして齊藤と取りとめもない話をしているうちに学校の校門に着いた。だいたいこの位の時間に着くと校庭の真ん中辺りで梓に挨拶されるはずだ。

道「あれっ？」

齊藤「どうした？」

道「いや、なんでもない。」

だれからか挨拶されることなく玄関に着いてしまった。おかしいな…。でも、まあ梓のことだから何か用事があって早く来たんだらう。そう解釈して、俺は教室に向かった。

（side）

漣「はあ……」

なんで朝からため息をついているのかというと、今日は律がないからだ。今日の朝、いつも通りに律の家に行つて、それから一緒に登校しようと思っていた。家に行ってみると、なぜか律が寝巻姿のまま出てきた。

律「いや、なんか風邪ひいちゃったらしくてな…だから今日休むわ！さわちゃんによろしくな。」

そう言つてドアを閉められてしまった…。

そういう訳で、律は今日は休みだ。別に律がいなくて寂しいというわけじゃないぞ？…ただいつもいるやつがいないと調子がくるうと

いうか何というか。

和「あら？どうしたの、漣。1人なんてめずらしいじゃない。」

漣「いや、律のやつがな……」

今朝のことを和に説明する。

和「そうなの……。実はね、唯も風邪ひいたらしくて……。朝起きたら携帯にメールがきていたの。」

漣「唯もか?!」

困ったな……。今日の部活はあの2人なし……。今日は個人練習の日にするか？そんなことを考えていると、さわ子先生が入ってきた。

さわ子「はい、HR始めるわよー!」

そういつて出欠の確認が始まった。

さわ子「あら、平沢さんと田井中さんは?」

和「先生、唯は風邪をひいて休むそうです。」

漣「あつ、先生、律も風邪をひいたらしいです。」

さわ子「めずらしいわね!。あの2人が風邪なんて。」

まったくだ。バカは風邪ひかないんじゃないのか……。

さわ子「ちなみに、今日琴吹さんはお家の都合で休むそうです。」
むぎのお家の都合って……。なんかすごそうだな……。ってそんなこと考
えてる場合じゃない!むぎも休みなのか……。3人もいないとなると
今日の部活どうしよう……。というか和がいてくれて本当によかった
……。

あつという間に放課後。

道「よし、部活いくか!」

そう意気込んで教室を出る。ちょうど隣のクラスもHRが終わったらしい。ドアの前を通り過ぎようとすると、いきなり教室から憂
ちやんが出てきた。

憂「あつ、道くん。」

道「あ、どーも。」

いきなりだったの、かしこまった挨拶になっちゃった。

憂「そうそう、梓ちゃん今日休みってこと知ってた？」

道「知らなかった……」

そうだったのか……そりゃあ朝会わないはずだ。

道「教えてくれてありがとう。またね。」

憂「うん。またね。」

そう言っただけで別れる。

道「今日は梓休みなのか……」

梓がいなくて寂しいということもあるが、俺一人で先輩たちの対処ができるかどうかが不安で仕方ない……。なんとかなるだろ、と心に言い聞かせて部室への階段をのぼる。

到着してドアの前に立つ。大体先輩たちは早く来ているので、ここに来ただけで騒がしいのが分かるのだが、今日はやけに静かだ。

道「なんかあったのか？」

心配になった俺はすぐにドアを開けて中を確認する。

道「あれ？」

中にいつもの活気はなく、ただ先輩がソファに1人座っていた。

漣「おお、道。梓はどうした？」

道「いや、風邪をひいたらしくて今日は休みです。」

そう言っただけで、先輩の顔が青ざめていくのが分かった。

漣「それは本当か……？」

道「本当ですけど……それより他の先輩たちはどうしたんですか？」

漣「実は……律と唯は風邪。むぎは家の用事で休み……らしい……」

と、いうことは……

道「今日は俺と先輩2人だけ?!」

漣「そういうことになるな……」

2人だけ、という言葉にドキッとする暇もなく、俺は立ちすくんだ

……

ということがあつて、今に至る。

道「……………」

漣「……………」

いまだにこの沈黙は続いている。このままでは不味い…。よし、こ
こは男の俺が行くしかないだろ！

道「漣先輩、お茶飲みますか？」

漣「あ、ああ。飲むよ。」

わかりました、と返事をして、奥の棚から日本茶の茶葉を取り出す。
実は紬先輩は俺のために日本茶まで用意してくれているのだ。一応
和菓子屋の息子なので、お茶の入れ方くらいは心得ている。
手早く準備し、カップと急須を机まで持っていく。

道「漣先輩、できましたよ。」

漣「あ、ああ。」

漣先輩は明らかに口数が少ない。男と2人つきりという状況に慣れ
ていないのだろう。そういう俺も女の人と2人つきりなんて経験は
ほとんどない。

漣先輩はカップを受け取ると、一口飲んだ。

漣「旨いな…これ。」

道「ありがとうございます。」

そう言つて自分も飲む。…うん、なかなかの出来だ。やっぱり日本
茶はいいな。

道「それにしても、これだけみんな休むなんてめずらしいですね。」

漣「そうだな。季節の変わり目には注意しないとな。」

お、良い感じに会話が弾んできた。

道「これだけ偶然が重なると逆に怖いですね。呪われてるんじゃない
かとか考えましたよ…」

漣「ははは。そんな訳ないだろ。（棒読み）」

漣先輩はあきらかに動揺している…。よく見ると脚も震えてるし。
道「冗談ですよ…。ところで今日は何しますか？」漣「そうだな…。
そつえば道、なんかギターケース持ってきてるけど…あれベース

だよな？」

道「はい、そうですよ。」

さすがベーシストなだけあってわかったようだ。

漣「めずらしいな。道がベース持つてくるなんて。」

道「確かにそうですね。俺も今朝急に持つてきたくなつて…」

もしかして、あれは今日起こることを予言していたのだろうか…。

漣「よし、じゃあ道。私にベースを指導してくれ。」

道「え！？でも、漣先輩は今のままでも十分上手ですし、俺なんかが教えたつて…」

漣「そんなことはないと思うぞ。だって私より道のほうが断然上手いし、こんな機会めつたにないと思うんだ。」漣先輩にここまで言つてもらつて断るわけにはいかないな。

道「わかりました。そうしましょう。じゃあ準備しましょうか。」

漣「ああ！」

漣先輩は目をキラキラさせて準備を始めた。この人は本当にベースが好きなんだな…。漣先輩のベースに対するひたむきさは尊敬に値する。俺も準備するか。

振り返ると、漣先輩はもう準備を終わらせていた。

道「漣先輩早いですね…」

漣「ああ！ひさしぶりにワクワクしてな！」

ド。ゴンボールの人かよ！そんなことは置いといて、俺も準備しよう。

そしてケースからベースを取り出した。

漣「おお、^{グレコ}Grecoか。」

（ちなみにグレコとは楽器のメーカーの名前のことである）

道「はい。Greco JB600 79年製です。」

漣「この木目の感じとかいいな！」

道「ありがとうございます。実はこのベースは、俺にとって最初のベースなんです。」

漣「私もそついうの欲しいな…」

このベースは、俺がベースを始めると言ったときに叔父さんがくれた物だ。

道「では、やっていきましょう。漣先輩はどの辺が弱いですか？」

漣「そうだな…、スラップがあんまり得意じゃないな。」

道「なるほど。」

スラップとはベースの奏法の1つで、引き方は様々あるが、基本的に手を握って親指を立てた状態が右手の基本の形だ。手首を使って親指で弦を叩いたり、人差し指や中指に弦をひっかけて弾くなどの弾き方が一般的だ。

道「漣先輩は尊敬してるベースリストとかはいるんですか？」

漣「私は特にいないな…。道は？」

ひなたひでかず

道「俺はストレイテナーの日向秀和さんですね。」

（ストレイテナーとは日本の4人組ロックバンドのことである）

漣「おお！私も知ってるぞ！」

道「さすがですね。今度CD貸しましょうか？」

漣「ああ、頼む！」

自分の趣味を分かってくれる人がいたとは…。なぜか俺の友達にはこういう人が少ない。

道「じゃあやっていきましょう。まず……」

そうして1時間ほど練習すると、漣先輩の手の動きが鈍くなっているのが分かった。

道「今日はこのくらいにしておきましょうか。」

漣「いや、私はまだ大丈夫だぞ？」

道「右手、動かなくなってきたるんじゃないですか？」

漣「うつ……」

さすがにちよつときつ過ぎたかな。漣先輩は女の子だ。さすがに無理させるわけにはいかない。

漣「そうだな。これで終わりにするよ。」

道「それがいいと思いますよ。」

漣「はあ。私もまだまだだな……」

道「そんなことないですよ。今日はかなりきつめなことをやったんですけど、よく1時間もできましたね。」これは嘘や冗談でなく本当のことだ。俺の我流トレーニング法ではあるが、俺がやってもきつい。それを慣れてない漣先輩が1時間できたというのは結構すごいことだ。

漣「ありがとうな、道。また教えてくれ。」

道「よろこんで。じゃあ片付けますか。」

そう言つて片付け作業に入った。……その時、悲劇は起きた。

俺が譜面台を元の場所に戻そうと、アンプからベースにつながっている線をまたごうとした時だった。

道「あつ……」

線に譜面台の脚が引つ掛かつて張つたところに、俺の脚がかかつてしまった。まずい!!

漣「どうした、道……つてわああ!!」

俺は勢いそのまま漣先輩に倒れこんでしまった。どすん!!と大きな音がする。

道「痛てて……はっ、大丈夫ですか漣先輩!!」

俺が目を開けると、そこには漣先輩の顔がすぐ目の前にあつた。距離としては20センチも離れていない。説明すると、まさに覆いかぶさっている、という体勢で、さらに先輩の腕を押さえつける形だ。つまりは押し倒しているのだ。……なんてベタなシチュエーションなんだ。

漣「んっ……ああ、なんとか大丈夫だ……」

俺がこの体勢の不味さによりやく気が着いたときには、先輩はもう目を開けてしまっていた。

漣「えっ? あ……えつと……」

そういつて顔を真っ赤にして恥ずかしがっている。しかも瞳を潤ませて。俺と漣先輩はどうしていいのか分からずとりあえず見つめあ

う。

道「（あれ……？なんだろう……）」

至近距離にある漣先輩の整った顔立ちに心臓の鼓動が早くなるのを感じた。俺は何を考えたのか、顔を近づけてしまう。

道「（まてまて、俺は何をしてるんだ！）」

そう分かつているはずなのに止まらない。少しずつ、少しずつ顔を近づけていってしまう。そうして距離が10センチほどになった時だった。

漣「……………っ！」

漣先輩が目をつぶる。これは……その……どういうことだろうか……？

道「（あ、これは……やばい！）」心の途中で覚悟を決めた時だった。部室のドアをノックする音が聞こえた。

和「漣、いる？入るわよ。」

生徒会長の和先輩の声だ。この声で俺と漣先輩は正気を取り戻した……がしかし、まだ脚が引つ掛かっているらしく、立ち上がることができなかった。

漣「和っ！ちよっ、待って……！」

漣先輩の思いむなく、和先輩が部室に入る。

和「漣のフアンクラブのことなんだけど……あ。」

道「……………」

漣「……………」

本日何度めの沈黙だろうか。和先輩に俺が漣先輩を押し倒している格好をバッチリしっかり見られてしまった。

和「……………お取り込み中みたいね。また明日来るわ。」そう言うときドアをがちゃりと閉めて、帰ってしまった。なんてベタな展開なんだよ……

道「漣先輩、申し訳ないです……」

完璧に冷静さを取り戻した俺は、脚に掛かっている線を外し、立ちあがった。

漣「明日和に何て言おう……」

漣先輩は燃え尽きたように真っ白になっていた。

道「とりあえず…帰りましょう……」

手早く片づけを済ませ、俺と漣先輩は学校を出た。

その帰り道。途中まで帰り道が一緒なので、2人並んで歩いていた。
終始無言で。

道「……………」

何を話せばいいのかまったく言葉が出てこない。そしてあつという
間に別れ道に着いてしまった。

道「では…漣先輩。また明日、学校で。」

漣「あ、ああ。また明日な。」

そうして別々の方向に歩きだした。漣先輩に嫌われたんじゃないだ
ろうか、という思いで頭がいっぱいだった。

道「明日の部活…どうなるんだろうな……」

そんなことを言いながらも、俺はあの時の漣先輩の顔を忘れられな
いでいた。

第7話（後書き）

あのベースは私が実際に使っているものです。

私の趣味が出てしまいました。が、今後もばんばん出していいことと思います（笑）

第8話 前編（前書き）

どうもハウス後輩（o）です。

前に上げてから1ヶ月ほど経ってしまいましたm（――）m

今回はアニメで言うところの7話のお話です。

なぜ前編なのかといいますと、最近は前後編にするのが流行りらしいので便乘してみました（笑）

というのはウソで、ただ単に長くなってしまったためです。すぐに後編も上げますので少々お待ちください。

第8話 前編

俺が澪先輩を押し倒してしまった事件の翌日、の放課後。授業風景はカット。軽音楽部は全員部室に集合していた。その日は澪先輩が視線を感じるといので、「澪先輩ストーカー事件?!」の捜査が始まった。もちろん真剣に考えていたのは紬先輩と梓と俺くらいだ…。結果的には澪先輩の髪に朝に食べた焼きそばパンのシールが付いていただけという結論にいたり、事件は解決した。

俺はというと、澪先輩の顔を見れないでいた。先輩を見るたびにあの時の映像が頭の中に浮かんでくる…。めちゃくちゃ恥ずかしい…。どうやら澪先輩も一緒のようで、俺と目が合うと恥ずかしそうに視線をそらしてしまう。未だにちゃんと澪先輩に謝罪できていないというのが現状だ。

悶々としていると、ドアの外側から声が聞こえてきた。

? 「あなたたち、何してるの!」

? 「うわああ!」

と同時に女子2人が倒れこんできた。入ってきたのは生徒会長の和先輩だった。

澪 「和、その子たちは?!」

見た限りでは、2年生の女子生徒のようだ。

2女A 「別に怪しいものではありません!」

2女B 「私たちは、澪先輩ファンクラブの者です!」

漣「ううう…その事は忘れようとしていたのに…。」

女の子たちがそう言くと、漣先輩は机に勢いよく突っ伏してしまつた。顔が青ざめていくのが分かる。どんだけのことがあったんだろうか…。というかファンクラブなんて物がこの世に実在していたのか…。ドラマや漫画の話だと思つてたな。

紬「もしかして、漣ちゃんの髪にシールが付いているのを見に？」

2女B「はい！他の会員から聞いて…！」

道「いやいや！ファンなら教えてあげようよ…」

2女A「私は教えてあげようつて言つたんですけど…」

2女B「でも、そういうの付けてるところが先輩らしくてステキなんです…！」

律「ステキか…？」

どうやら漣先輩の”らしさ”があらぬ方向へ進んでいるようだ。

唯「私はわざと付けてるのかと思つてたよ…！」

漣「お前は知つてたのか…！」

青ざめた顔のまま漣先輩が叫ぶ。知つてたなら教えてあげようよ…。というかファンクラブってすさまじいな…。間違つてくつついてしまったシールがステキ、という感覚が俺には理解できない…。

女子生徒たちが帰り、和先輩を加えてまた全員席に着く。もちろん紬先輩はお茶を出すことを忘れない。あの人本当にお嬢様なのか…？

和「ごめん。私がすっかりしてなかったせいで、フアンクラブの
たちが…」

律「なんで和が謝るんだ？」

唯「だけど、フアンクラブってまだあったんだね。」

紬「曾我部先輩が卒業してなくなっちゃったと思ってた！」

梓「曾我部先輩ってだれですか？」

律「あれ？梓は知らないんだっけ。」

道「ああ。もしかして2個上の生徒会長さんのことですか？」
おぼろげな記憶を引っ張り出す。特徴的な苗字の人だったので覚えていた。名前は確か…恵^{めぐみ}だったかな？

唯「そうそう。澪ちゃんフアンクラブの会長だった人だよ。」

律「そうか…あれからそんなに長い月日が経ったのか…」

律先輩は遠い目をしながら俺たちに説明してくれた。やっぱり記憶を捏造したので、結局澪先輩が説明しなおしてくれた。

長いのでかいつまんで話すと、澪先輩が妙な視線を感じて生徒会に相談に行く↓曾我部先輩に会う↓話す↓やけに自分のことや軽音部のことを知っていたので気になって聞く↓先輩が同様し、ごまかす↓立ち去ろうとした瞬間会員証が落ちる↓ばれる↓ストーカーしていたの**も**ばれる…という出会いらしい。なんて衝撃的な出会い…。軽く犯罪者だぞ…。そんな人が生徒会長やっていいのかというツツコミは置いておこう。

唯「だから私たち、曾我部先輩に何かできないかなーって思ったんだ。」

漣「そう。それで…」

これもちよつと長いので省略して。卒業式後、先輩を講堂に呼び出して、先輩のためだけに卒業ライブをした、という話だ。なぜかサインも頼まれたらしい…。その時の一言が「みおたんって書いて！」だ。

梓「書いたんですか…みおたん…」

漣「ああ…書いた…」

和「先輩、とっても喜んでたわ。」

その喜びと引き換えに、漣先輩の顔がどんどん青ざめていく…。和先輩はスカートのポケットから何かを取り出した。

梓「会員番号1番の会員証?!」

漣「しかも和の名前?!」

和「引き継ぎの時にこれも渡されて…断りきれなくて受け取ったの。」

和先輩の性格ならそうだろうな。それにしてもファンクラブにも受け継ぎ制度があるのか…。

和「結局会長としての責務は何一つ果たせなかった…」

唯「和ちゃん…」

言ってしまうば押しつけられたようなもののに…。それにも責任を感じている和先輩はすごい。うちの部長にも見習わせたいな。

和「だから、今日はみんなにお願いに来たの。ファンクラブの子たちのために、お茶会を開いてくれないかなって。」

紬「お茶会？」

和「そう。このままじゃ、曾我部先輩にも申し訳なくて…」

唯「わかった！ 私たちも協力するよ！！」

唯先輩は目をきらつきらせながら嬉しそうにお茶会を引き受けた。みんなの意見を聞かないのはどうかと思うが、俺も賛成だ。曾我部先輩とはまったく面識はないが、これは和先輩のためでもあるし、漣先輩のためでもある。しかもそろそろあの誤解を解かなければ！！

道「やりましょう！！！！」

そいつって俺は立ち上がって拳をつきあげる。

漣「道まで？！」

漣先輩以外みんな次々とやる気を見せる。みんなの純粋な感謝の気持ちに対してちよつとした下心を持ってしまっていることに罪悪感を感じたが、気にしないことにした！

和「みんなありがとう。…そっいえばこれは昨日行った時に話そうと思ってたのよ。」

律「昨日はメンバーほとんどいなかったもんな…」

唯「私たちがいない間に何かあった？」

とうとうこの話題に触れてきたな…。俺はとつさに漣先輩に目で視線を送る。が目が合った瞬間顔を真っ赤にしてうつむき始める漣先輩。ちよつとそれはまずいのでは…。

道「いやいやいや、何もなかったですよ。何にも。ですよね漣先輩？」

よし、いい感じでいつも通り感が出せている。漣先輩頼みますよ！

漣「あ、あつ、ああ。もちろん何もなかったぞ…！」

いつもと比べて2倍の音量。うわー…それだと絶対何かあったと思われるですよ…。あともちろんつて…。

唯「ん？まあいつか。」

唯先輩でよかった…。とほつとしていたが、横を見ると律先輩がにやにやしている。

さすが律先輩。なんでこういうところに気がつくかな…。後で問い詰められること間違いなし…！

紬「そうと決まれば、どんなお茶会にする？！」

唯「ええつと…漣ちゃんの入場でしょ？ケーキカットは外せないし…」

律「花束贈呈と思い出のアルバムとか…！」

結婚式の披露宴かよ…。俺と梓はうるたえる漣先輩と話をどんどん進めていく先輩たちを交互に眺めていた。

話し合いの結果、役割が決まった。漣先輩以外の先輩たちが内容や必要な物をそろえる、梓がポスター作り、となった。ちなみに和先

輩は会場をおさえたり、ファンクラブ会員に知らせる仕事の担当だ。俺と漣先輩は何をするのかって？……お茶会で演奏する新曲を作ってくる、という仕事らしい。俺はてっきり力仕事でもするのかと思っていたのにまさかこんな仕事がまわってくるとは…。

律「漣、道。これはとても重要な役割だから真剣にやってこいよ。」

漣「ちょ、ちょっと待て律！！みんなでやるんじゃないのか？！」

道「そうですよ！それに…」

俺はちらりと隣にいる漣先輩を見る。今はタイミングが悪すぎだ…。

律「いいからいいから！まかせたぞー！」

そう言つて律先輩は企画組に戻る。律先輩の顔がにやついていたのはおそらく先輩なりの気遣いなんだろう。なんでこういうときばかり部長らしいんだよ！！

道「とりあえず……やりますか。」

漣「……そうだな。」

そう言つて机に向かいあつて話し合いを始める。

道「じゃあ作詞は先輩にお願いします。曲は俺が何とかするんで。」

漣「そうだな。私作曲はあんまり得意じゃないし。」

正直いうと俺もあまり作曲経験がない。前のバンドでも2、3曲しか作ってないし。漣先輩がいないのが痛いな…。ちなみにお茶会までは10日間ある。

道「じゃあ期限を決めましょう。えーと…先輩今週の土日どっちか

空いてますか？」

漣「土曜日なら…」

道「じゃあ土曜日俺の家で合わせましょう。親父のスタジオ使って。」

漣「ええええええ！！！！」

漣先輩の絶叫にみんなが振り向く。しまった、男友達を呼ぶ感覚で女の子を誘ってしまった…。

梓「どうしたんですか？！」

大きめの白い紙に向かってペンを走らせていたポスター係の梓が驚いたように立ち上がる。

漣「なつ、なんでもない！なんでもないぞ！作業に戻ってくれ。」

みんなは不思議そうな顔をして作業に戻る。あ、律先輩だけはにやにやしてた。

漣「部室じゃだめなのか？！」

漣先輩が通常の0、5倍くらいの声量で話す。

道「でもギター弾けてマイクも使えた方がいいですよ？しかも録音機材もなさそうですし…」

漣「確かにそうだな…」

俺の考えは、デモテープを録音してみんなに配る。それで個別に練習してもらうという作戦だ。期間が短いからこの方法が効率的だと思う。これなら学校では他の準備もできるしな。

道「よし！じゃあこれでいきましょう！じゃあ歌詞の方お願いしますね。詳しいことは後でメールで説明します。」

そう言つて俺は椅子を立つと、企画組の手伝いにまわった。

なんで俺は勝手に決定してしまったのかというと、漣先輩がこんな状態では話が進まないに違いないと思つたからだ。だから今回は俺が引つ張らなければ！なんだか俺唯先輩みたいだな…。

作曲への不安と、漣先輩に対する不安でいっぱいのまま作業を進めていった。

第8話 前編（後書き）

今回は今までと少し書き方を変えてみました。少しは見やすくなっ
たと思いますが…。

第8話 後編（前書き）

後編です m — — m

第8話 後編

そして数日後の土曜日。 あっという間に漣先輩と曲を合わせる日となった。

曲は3曲ほど作ったが、正直言うと自信がない。 ガールズバンドの曲を作るなんて初めてだったからだ。

これを作るのには大変な労力を費やした。 まず先輩たちの今までの曲を聴いてコード進行のパターンなどを調べたり、他のガールズバンドの曲を聴いたりしてなど色々試行錯誤してやっと完成。 でも結局使われるのは1曲だけなんだよな……。 悲しい……。

そんな感じで色々考えているうちに、 漣先輩がそろそろ来る時間になっていた。

道「なんか、緊張するな……」

女の子を家に呼ぶなんて生まれて初めてだ……。 格好は大丈夫だよな？ 服はいつも通りの服。 ここで格好つけすぎてもな……。 髪、異常なし。 スタジオ、片付いてる。 よし大丈夫！！

安全確認が終わると同時にチャイムが鳴った。 ……… 来たか。 俺は玄関に向かった。

（side 漣）

漣「ここが道の家か……」

漣は言われた時間の20分も前に来ていた。

漣「朗蘭堂に来れば分かりますって言ってたけど……本当に隣にあるんだな……。」

道の家は朗蘭堂という菓子専門店を経営しており、今巷で話題の店

なのである。

道の家は店の2階や奥に家があるのではなく、隣にまた家が建てられているという構造だ。なぜかというと、家庭と商売は切り離されてなければいけないという道の父の意向らしい。

漣「格好とか大丈夫かな…？」

いちいち鏡を取り出しては髪を直したり、服のほこりを払ったりとせわしなくしていた。大して変わってないのだが、それが女の子というものである。ちなみに今日は制服ではなく私服だ。

そんなことを繰り返しているうちに、時間の5分前となった。

漣「よし！押すぞ…。」

漣はチャイムを鳴らした。

＼side漣　END＼

ドアを開けるとそこには私服姿でギターケースを背負った漣先輩がいた。

漣「おじゃま…します。」

道「ど、どうも…」

うわー…やっぱ緊張すんなーこれ！！

漣先輩は私服だった。先輩が私服で来ることは想定していたが、想定外の破壊力だった。ファンクラブが作られるだけあって、漣先輩はとても可愛い。そんな人が俺の家なんかに来たんだからそりゃあドキドキしてしまうがなと思う。まあ呼んだのは俺なんだけだな…。

道「とりあえず上がってください。」
そう言つて澪先輩をスタジオへと通す。

澪「うわぁ……」

スタジオに入ると澪先輩がとても驚いているのが分かった。それもそのはず、普通の家の中にスタジオがあるんだから……。ここはギター部屋とまた違って、ギターを弾くためにある部屋だ。家の決まりでギターを弾く時はここじゃないといけないことになっている。ちなみにギター部屋とはドアをはさんで隣だ。

道「とりあえずそこに座ってください。」

澪「あ、ああ。」

ここには休憩場所もしっかり備わっている。まずは会議開始だ。

道「いきなりですけど、歌詞書いてきてくれましたか？」

澪「ああ！書いてきたぞ！」

そう言つて澪先輩はバックの中を探し始めた。あれ？やけに気合いいが入ってるな。ここに入るまでは緊張してるようにみえたけど……でも緊張してないならいいか。

澪「これだ！」

そういつてテーブルにばんっ！と一枚のルーズリーフを置く。

道「じゃあ見させてもらいますね。えーと……っ？！」

まず曲名を見た瞬間驚く。曲名「ぴゅあぴゅあはーと」

道「……………か、可愛い曲名ですね。」

漣「だろ?! 私もいいと思っただんだ!」

もう語尾にハートが付きそうな勢いだ。でもまだ分からないぞ。歌は曲名で決まるもんじゃないからな。

そっ心に言い聞かせて本文を読み始める。

道「……………」

言葉が出なくなる体験をしたのは初めてだった。歌詞の1行1行が甘ったるい。

律先輩「こういうのは最初に言っておいて欲しかったっス」。

漣「どうだ?!」

目をキラキラ輝かせて感想を求めてくる。

道「い、いいんじゃないですか?! 漣先輩らしくて。ただですね、この部分が…」

俺はそういうふうにして遠回しに問題点を改善していった。

結果的に最初よりもだいぶマシになった。色々と意見がぶつかったがなんとかまとまった。

道「じゃあ歌詞も完成したということで、次は曲聴いてください。」

漣「楽しみだな!!」

自分が作った曲を人に聴かせるというのは非常に緊張する…。

道「3曲あるんですが、順番に流していくのでいいと思ったのをおっしゃってください。」

そして流す。1曲目は格好よさを重視した曲だ。7:3ぐらいで可愛さよりも格好よさを出している。そもそもアコースティックギターで可愛さをどう出すかというので最初つまづいた。結局はキーボードに任せてしまおうという結論にいたった。

2曲目は可愛いというか甘いというかそんな曲。先輩たちの曲をベ
ースに作ったので、それっぽくなってると思う。

3曲目はゆっくりというかバラードに近い曲。まあこれはないかな。
そして3曲すべて流したところでプレーヤーを止めた。

道「どれがよかったですか？」

漣「2曲目だな！」

即答だった。やっぱりな。そうなると思った…。

道「じゃあ歌詞に付けていきましょうか…」

そんな感じでデモテープのレコーディング開始。

1時間ほどかかって完成。前から思っていたが、漣先輩の歌唱力は
すごい。

道「やっぱり漣先輩歌上手いですね。」

漣「そうか…？あんまり褒めてもらったことないな。」

まさに『もっと評価されるべき』だよな。

道「あとは俺がCDに焼いておきますね。…これで終わったことにな
るんですけど、どうしますか？」

漣「んー…そうだ、ギター部屋が見たいな！」

道「そっいえば前に見たいって言ってましたね。では1名様ご案内
いたします。」

漣「楽しみだなー!!」

俺のちよつとしたボケはスルーされたが、漣先輩を隣の部屋へ連れていく。

そして真つ暗な部屋の電気を付ける。

漣「わぁ…本当に広いなだな…」

そこそこの広めな部屋の壁一面にギターが掛かっている。ちよつとしたギターシヨップだ。

部屋を見回した漣先輩はエレキギターのコーナーへ向かい、そこで立ち止まった。

漣「なんでレスポールだけなんだ？」

道「親父の趣味です…」

なぜか俺の親父はレスポール以外弾きたがらない。まあ気持ちは分からないでもないが。

ちなみにレスポールとは唯先輩が使っているタイプのギターのことだ。

すると漣先輩の視線が1本のギターに向けられる。

漣「これってSGだよな？」

道「そのSGは俺のなんです。あるバンドのボーカルに影響されて…。」

高1の時に必死こいてバイトして購入した物だ。

道「さわってみますか？」

そう言つてギターハンガーから降ろし、漣先輩に手渡す。

漣「うわぁ…唯とか梓のとはまた違っていいな!…ちなみに…」ど

れくらいの値段なんだ?」

道「25万です。」

漣「返す。」

そう言っただけで突き返されてしまった。やっぱり高校生に25万は重かったか。

たかがバンドに影響されただけで25万のギターを買ってしまうという所はやはり親父に似てしまったのだろうか…。

漣「すごいな…ベースもある。」

もともと親父はベースに興味がなかったのだが、俺がベースの良さを力説し続けたところ、家に1本また1本とベースが増えていった。

道「残念ながらレフティはいんですよね…」

漣「そうなのか…残念だな…」

漣先輩は少し落ち込んだが、それでも他のギターを見ては目を輝かせた。本当に楽器が好きなんだな…。

それから漣先輩は1時間ほど見たところで満足といった表情を見せた。漣先輩はギターショップにいつて何時間もつぶせるタイプの人のようだ。まあ俺もその1人だが。なぜか弾かなくても買わなくても楽しいんだよな。

道「満足しましたか?」

漣「ああ!」

そう言っただけで笑顔を見せる。……破壊力抜群だ。よし……今がチャンスだな。

道「そういえば……この間はすみませんでした。」

漣「この間？……あつ！」

先輩は顔真つ赤にする。

道「ちゃんと謝れなくて……本当にすみませんでした。」

俺は深々と礼をする。完璧な90度のお辞儀だ。

漣「もう気にしてないから大丈夫だ。」

道「ほんとですか?!」

漣「ああ。」

よかった……。許さないと言われたらどうしようかと思った。

漣「私はこれで帰るよ。今日はありがとうな。」

道「いえいえ、こちらこそ。あ、送りますよ。」

遠慮されて断られたが、じゃあ切りのいい場所までということにして承諾してもらった。

バス停に到着。まだバスが来ていなかったなので2人で立ち話をする。今日のレコーディングの出来や、お茶会の話なんかをしているとようやくバスが来た。

道「じゃあまた明後日。」

漣「ああ。今度は私の家にも来いよ。」

じゃあ近いうちに、と俺が言い終える前に先輩はバスに乗り込んでしまった。

そして発進するバスを見送る。さすがに手は振らない。

道「さ、帰ってCD焼くか！」

俺は気合いを入れ直し、家に帰った。

｝side 漣｝

漣「はあ…疲れた……」

この疲れは体力的なものではなく、精神的なものなのだろう。
前半はほとんど緊張しっぱなしだったのだからそれかもしれない
ことである。

漣「（でも…楽しかったな…）」

疲れているにも関わらず、漣の顔には自然と笑みがこぼれていた。
しかしその直後、漣の顔は朱色に染まる。

―― 今度は私の家にも来いよ ― 先ほどの漣の発言だ。

漣「（なんであんなこと言ったんだろ…）」

女友達に言うのならたいして問題ではない。

しかし男に向かってそれを言ってしまうと、別の意味として捉えら
れる可能性がある。

その時の漣が道を「友達」なのか、また別の対象としてそれを言っ
たのかは分からない。

漣「（ま……いいか…）」

そして漣はごまかすようにして窓の流れる風景に目を移した。

｝side 漣 END ｝

秋山澪ファンクラブお茶会の準備は着々と進んでいた。学校の教室、掲示板、廊下のいたるところにポスターが貼つてある。梓やりすぎ…。

和「だんだん本格的になつてきたわね。」

唯「澪ちゃんファンのために大盤振る舞い！澪ちゃんえんぴつ、澪ちゃん消しゴム、澪ちゃんティッシュ…」

そのほかに澪ちゃんチョコ、澪ちゃん栓抜き、澪ちゃんお箸、澪ちゃん孫の手がある。「澪ちゃん」が付けばなんでもいいんだな…というか孫の手ってなんだよ。

澪「変なものまで作るな！！！」

唯「澪ちゃんシール貼っただけ！」

そんな自慢げに言われましても。

紬「お手軽だけど可愛いでしょ？」

澪「もらって嬉しいのか…それ……」

澪先輩は確かに可愛いと思う。でも俺は遠慮しておきます…。

ちなみに俺のクラスの齊藤は澪先輩のファンだ。残念ながらファンクラブは女子生徒限定。友達のよしみで特別に呼んでやろうとも思つたが、そしたら他の連中が黙つてない。

男で澪先輩のファンは実のところ結構な数がいる。男子生徒は全校の女子生徒の半分ほどしかないのだが、その半分くらいが澪先輩のファンという噂も…。

和「憂がクッキーも焼いてくれたわ。」

唯「澪ちゃんクッキーですよ」

それに関してはもう澪先輩関係ないし！憂ちゃんクッキーだもんな。はあー、と澪先輩が大きなため息をつく。

梓「律先輩、会費はいくらとる？とか言い出さないでくださいよ！」

道「あ、言いそう。」

律「なにをー！？人を守銭奴のように！」

律先輩をいじり始めようとしたとき、部室のドアがノックされた。

唯「はい！」

入ってきたのはこの間の秋山澪ファンクラブの会員の子だった。

2女A「失礼します！差し入れ持ってきました。」

唯「ほんとにー！？」

2女B「皆さんで食べてください。」

みんなが差し入れの袋に集まる。

唯「焼きそばパンだ！」

紬「お茶まである！」

なんて用意のいい子たちなんだ！澪先輩はいいファンを持ったな。というか俺なにもしてないのに食っていいのか…。とか言ってる俺の分がなかったら泣くけどな。

唯「食べていい？」

梓「手はやっ！」

澪「……ありがとう。」

ファンに微笑みかける澪先輩。

2女AB「………お茶会楽しみにしてます！失礼しました！！」
勢いよくドアを閉めて去って行った。

和「みんな楽しみにしてくれてるみたいで良かった。」

律「それで、肝心の曽我部先輩は来るのか？」

和「それが……これないらしいの……」

梓「ええ！！これないんですか！？」

和「手紙は書いたんだけど、その日はサークルの旅行でこれないって。」

道「それじゃあやる意味が……」

そもそも曽我部先輩のために決定したお茶会だ。

紬「日程ずらす？」

和「もう告知したんなら、わざわざ日程変える必要ないって言われたの。」

梓「そんな……」

和「曾我部先輩の望みは、ファンクラブを継続させて盛り上げることだからって…。お茶会でファンクラブの現役会員たちが楽しんでくれればそれで満足だって…。」

唯「なんか大人な発言…」

紬「女子大生だもんね。」

華の女子大生とはいうが、もう限りなく大人、社会人に近い立場にいることに変わりはない。

律「卒業して大人になって、漣ファンも卒業したってことか。」

梓「そんなことないです！きつとたまたま予定が重なって仕方がなかったんですよ！」

和「うん。きつと私たちに気を遣わせないようにって思っただけなのかもね。」

道「いい人ですね。」

漣先輩を見ると、後輩からの差し入れの焼きそばパンを見つめていた。

漣「（私も…私も卒業したらそんな風に大人になっちゃうのかな…）」

律「その時漣の心には友人たちと過ごした日々が走馬灯のようにぐるぐると…」

漣「だから勝手にナレーションいれるな…！」

道「見事なコントですね。」

一応ほめることにした。

漣「コントじゃない!!」

和「はいはい。それじゃあ日程もプログラム通り、変更は無しってことで進めましょう。」

紬「はい。当日の進行表。司会はりっちゃんと唯ちゃんをお願いします。」

唯・律「ういー!」

2人そろって敬礼。和先輩は淡々と進行の説明に入る。

進行表にはもちろんバンド演奏がある。言ってしまったら俺の部活での初仕事だ。俺は演奏しないけど、なんか緊張するな…。実を言うと、まだ一回も合わせてない。

道「すいません。ちょっと俺からいいですか?」

和「どうしたの?」

道「新曲のデモ、みなさんに配りましたけど、もちろんもう合わせられますよね?」

ちよつと気になったので聞いてみる。

紬「私はバッチリよ。」

紬先輩問題なし。

澪「私はさすがに大丈夫だ。」

そりゃあ一緒に作ったようなもんだからな。問題なし。

梓「まあ一通りは。あとは細かいところだけだし。」

梓も大丈夫だな。問題なし。

唯・律「……………」

残りの2人からはやっぱり何も聞こえてこない。一応聞いてみるか。

道「お2人ともどうしたんですか。」

正直答えが分かってるので、聞かなくてもいいんだが…。

律「ほら、あれだ。私らは…」

唯「そ、そうだよ、りっちゃん！」

道「澪ちゃんグッズ作ってたから、は無しで。」

唯・律「あ……………」

道「はい居残り決定！」

唯・律「えええー！！」

異論は聞かない！！

律「ひ、ひどいぞ！今日は見たい番組あったのに！」

道「そんなこと言える立場じゃないでしょう！まさかCD聴いてないとか言いませんよね？」

律「ぎくつ。」

試しに言ってみただけなのに……。まさか本当とは。

唯「私は聴いたよ!」

でもやってないですよ。まあ律先輩よりまし。

道「今日CD持ってますか?」

唯「……なくした。」

律先輩よりたち悪い……。

これは最終手段に出るしかない。俺は携帯を取り出し、ある人物に電話をかける。

道「もしもし? 憂ちゃん? 申し訳ないんだけど、唯先輩の晩御飯今日から3日間いらないから。うん。詳しいことは後で説明するけど……うん。ごめんね。それじゃ。」

携帯の電源を切る。こういう時は察しのいい唯先輩……涙目。

道「これで心おきなく練習できますね。」

俺は唯先輩が嫌いだからこんなことしてるんじゃないですよ? 唯先輩のためなんです。俺は平気で心を鬼にしますよ。

律「お前って……案外Sなんだな……」

道「なに言ってるんですか? 律先輩ですよ。」

俺も今さっき気付きましたよ。俺は澪先輩に目でサインを送る。

律「は?」

澪先輩はうなずくと、携帯を取り出し電話をかける。

漣「もしもし？律のお母さんですか？漣ですけど、今日から3日間律の晩御飯…」

律「ちょ、ちよっとー！！！！」

漣先輩が携帯を切る。律先輩の抵抗空しく、地獄の居残りが決定した。

なんでこんなに手際がいいのかというと、前々から漣先輩と話していたからである。あの2人はこれが予想されるので、俺がサインを出したら漣先輩もお願ひします、と言っておいたのだ。俺、なんて策士。

部屋の隅っこで2人並んでうずくまっていたので、首根っこをつかみソファーに座らせる。

道「じゃあこれ渡すんで、今から30分リピートで聴き続けててください。俺たちは話し合ってますから。ちなみに私語厳禁ですよ。喋ったら居残り時間延長。」

俺は微笑みながら唯先輩と律先輩それぞれにデモCDが入ったプレーヤーを渡した。

道「さ、話し合い始めましょうか。」

梓「道って……敵に回したくないタイプですね……」

漣「ああ……」

これは愛のムチなんです。わかってください。

4日後。秋山漣ファンクラブお茶会当日。

地獄の居残りの成果もあり、唯先輩と律先輩もなんとか形になった。これも先輩達や梓が残って練習につき合ってくれたからだ。俺だけだったら間に合ってなかったかもしれない…。

和「さあ。今日はいいいお茶会にしましょう。」

6人「おーー!!」

今は開場10分前。場所は俺たちの部室とは逆の第一音楽室。主に授業で使うのはこっちの部屋。

広さも部室の約2倍ほど。ここなら人を呼んでちょっとしたライブもできる。まさにお茶会にはうってつけの場所だ。

ついに開場時間となる。そろそろ澪先輩のファンの人たちが入ってくる。待ち切れず、時間の結構前から居た人もいたな…。本当にどっかのミュージシャンのライブなんじゃないかと錯覚する。

澪「……………」

澪先輩はステージの脇から、会場に入ってくる人たちを見ていつも以上に顔が青ざめている。

律「澪！そんな緊張すんなって!!」

唯「そうだよ澪ちゃん!」

そんな励ましもむなしく、澪先輩の顔はさらに青くなっていく。いや、紺色だな…。

そうこうしているうちに、とうとうお茶会スタートの時間となった。

和「唯、律。お願い。」

和先輩に指示され、唯先輩と律先輩がステージ上へ。

律「えー本日は、第1回秋山澪ファンクラブお茶会にお集まりいただき、まことにありがとうございます。僭越ながら司会を務めさせていただきます、わたくし田井中律と！」

唯「平沢唯です!!」

2人「よろしくお願ひしまーす!!」

パチパチと拍手が起こる。第1回ということは2回が?……というツツコミは今回は無しで。

梓「たくさん集まりましたね!!」

紬「そうね!!」

道「上手くいくといいんですけど……」

予定通り、入場↓澪先輩から一言↓ケーキ入刀↓お茶とケーキ、澪先輩によるキャンドルサービス↓秋山澪への100の質問コーナー↓秋山澪の半生をスライド写真とともに振り返る↓バンド演奏、という流れで進行していった。

ケーキ入刀ではなぜか梓と一緒にやることに。初の共同作業って……。質問コーナーではファンたちのあまりの質問の内容に俺は6メートルほど引かせていただいた……。まあ俺だけではなかったみたいだが……。

とまあ順調に進んで、バンド演奏に入るところだった。

律「それではフィナーレは私たち放課後ティータイムの演奏で……」

漣「ちょっと待って！」

いきなりのストップ。俺としては一番心配なバンド演奏を前にしていたので、少し驚いてしまった。

漣「あのっ…みなさんに聞いてほしいものがあります。私…この気持ち、口では伝えられそうにないから、詩を作ってきました！」

ざわざわと会場がざわめく。まったくプログラムにないことだったのでメンバーも少々驚いた様子だったが、あの恥ずかしがり屋の漣先輩が自分からみんなのために詩をつくってきてくれたのだから止める理由がない。むしろ喜ぶべきことだ。

律「わはっ！サプライズ！！」

サプライズなのは良いことだと思う。しかしよく考えてみて欲しい。

漣先輩だぞ！！

漣先輩はポケットから1枚のルーズリーフを取り出す。

漣「ときめきシュガー。大切なあなたにカaramelソース。グラニュー糖にブラウンシュガー……」

割愛ということで省かせていただが、まったく予想通りの内容。甘ったるい！長さで言えば4行いかないぐらいだったのだが、俺は前半でお腹いっぱいだ…。

漣「……あなたの火加減で美味しくなるの！！」

びしっ！と決めた、つもりだったのだが……さすがのファンも漣先輩の世界にはついて行けないようで、ぽかんと口を開けていた。

漣「はっ……」

漣先輩は我を取り戻すと、ファン達の様子に気づき慌て始めた。

律「ぐっ……さすがにファンでも漣の境地にはたどり着けなかった

か…」

そう言う并向こう側の脇にいる唯先輩に合図を送り、 澪先輩のもとへと向かう。

2人「それではここで演奏でーす!!」

その後ろ通つて紬先輩が固まった澪先輩を椅子ごと引きずって脇までもっていく。

律「放課後ティータイムの新曲ー!」

唯「ぴゅあぴゅあはーと!!」

とうとう始まったか…上手いこといつてくれよ。

律先輩のスティックから始まり、軽快な前奏へと続く。さわやかさと、可愛らしさを兼ね備えた曲になっている。もちろん格好よさも忘れない。そんな曲になった。

曲が終わり、拍手の渦に包まれる。

道「やっぱいい曲だなー…」

思わず自画自賛。これはもうほとんど先輩たちと梓のおかげだけだな。

唯「はいチーズ!」

カシャッとカメラのシャッター音がする。お茶会最後のプログラムの記念写真だ。

みごとに澪先輩の顔は引きつっていたがみんな満足気な顔で映っていた。

和「この盛り上がり……曾我部先輩にも見せたかったな……」

道「動画とか撮っておけばよかったですね……」

梓「そうだ！」

梓はポケットから携帯をとりだして構える。どうやら写真を撮るらしい。

和「そんなの撮ってどうするの？」

梓「送ってあげるんです！曾我部先輩に。」

和「でも、先輩のアドレスが……」

梓「それは生徒会で調べてください！」

曾我部先輩はこの写真を見てにやにやするんだろうな……。

お茶会終了後。メンバー全員は部室に集まり、またお茶を飲んでいった。

律「いやー！盛り上がったなー！」

唯「そうだねりっちゃんー！」

道「でもコントの律先輩のボケは微妙でしたよ。」

律「なんだとー！ー！」

いつも通りのノリに戻る。最近忙しかったのでこういう時間が懐か

しく感じる。

澪「恥ずかしかった…」

澪先輩はとうとう青を通り越して真っ白になっていた。

道「澪先輩、お疲れ様でした。いい歌でしたよ。」

紬「なんか澪ちゃんの気持ち伝わってきたわ。」

澪「はは…ありがとう…」

お世辞抜きにいい曲だった。……よし、言ってみるか。

道「先輩方、梓。お疲れのところ申し訳ないですが、ちょっと聞いてください。」

唯「なにになに…?!」

律「なんだ…？決意表明か？」

今回はそういうのはスルーで。真面目な話。

俺は鞆から一枚のチラシを取り出し、ばんっ！と机の上に置いた。

道「これに出てみませんか…!!」

—— Boys & Girls MUSIC FESTIVAL
参加者大募集!! ——

第8話 後編（後書き）

次はオリジナルです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8720k/>

真・けいおん！

2011年3月5日23時02分発行